

はじめに

喜寿を迎えた裕子さんの日々は、今も忙しい。金曜日の夜は国会前へ仲間と連れ立って出かけ、原発推進政策への抗議行動を八年つづけ、今はコロナ禍で中断しているが、毎月三日の昼には巢鴨駅頭に立ち「アベ政治を許さない」のポスターを掲げ、その意志を仲間と共に示し続け、すでに連続五〇回を超えている。

今回、この本の巻頭に文を寄せるにあたり、改めて裕子さんをひと言で表すとなんだろうと、あれこれ考えた。「無類の勉強好き」「おっちょこちょい」「仕事人間」「夢追い人」「超楽道家」どれも笑えるエピソードを交えて語れる一面なのだが、あえてひとつに絞るとすれば『不屈』だと思う。

裕子さんは、第二次世界大戦の最中に満州の新京で生まれ、二歳で敗戦、三歳で引き上げる時にその『不屈』ぶりを発揮する。母・マリさんによれば、一カ月に及ぶ引き上げの中、下痢と重度の栄養失調で裕子さんは泣き声も出ないほど衰弱したそうだ。同様の子どもを抱える親たちが、我が子の生き残りに一縷の望みを掛け中国人の里親に預ける中、せめて腕の中で看取ってやりたいと、預けなかつたそうだ。三歳の裕子さんはガリガリに痩せ、立ち上がる力もなくなりながら、すし詰め貨物車に耐え、土砂降りの行軍に耐え、猛烈な暑さの船底で一週間を生き延びた。

小学校、中学校と超のつく優等生。「早く寝なさい」という親の目を盗み、布団に隠れて勉強をした。大学には早稲田の文学部ロシア文学科を選んだ。高校の先生には「赤くなる」と反対されたが意志を曲げなかつた。

そして、男女格差の激しい総合商社に就職する。すぐに結婚、妊娠した。『寿退社』という言葉が普通だった時代、働きながら子どもを産むことを選んだ裕子さんに吹いた逆風は想像に難くない。そんな中、同じ境遇の女性たちとともに産休制度を会社から勝ち取った。私（長女）が小学校に上がる時には、学童保育室の設置を自治体に掛け合い実現した。さらに学童保育を全国の小学校に普及させようと、共働きの親たちとともに全国規模に運動を広げ、働く親

とその子どもたちのために闘い続けた。

小学生の私の記憶の中で、裕子さんは、いつもものを書き、本を読み、仲間と会議をし、常に何か燃えていた。そして希望のある未来予想図を楽しそうに話ってくれた。

朝、出勤する時は、ふんわりと髪をカールして、花柄のワンピースの裾を風になびかせ、颯爽と道をゆく。その後ろ姿は、吾が母ながら「カッコいいなあ」と鼻が高かった。高校生となった頃、女の先輩として追いつけそうもないすこみを感じた。

仕事と運動にあけくれた裕子さんが齢七十も半ばを越えた頃、九十半ばを過ぎた母マリさんの介護のため運動の中心的立場から退いた。それほど得意とは思えない家事と介護に真剣に取り組み、母を看取った。腰痛、腱鞘炎と闘いながらの介護に、やはり『不屈』を見た。

それから半年あまり、冒頭のような復活ぶりには舌を巻く。いつだったか、裕子さんに言われた言葉がずっと頭にある。「岐路に立ち、どちらへ進むか迷った時には、すこし背伸びしないと難しいかな、と思うほうを選んだ方がいい。」常に世の中を良くしたいと願い、果敢に挑み、不屈の闘いを続ける裕子さんらしい。

今回、裕子さんの喜寿に際し、裕子さんの本を妹の菜生とともに自費出版することにした。ぜひ書きおろしを、とも考えたが、まだまだ忙しい裕子さんの状況を考え、過去に書いたルポルタージュから本人選のものをまとめた。男女雇用機会均等法施行後、第一号の女性総合職社員として、前例の無い道を切り拓いた裕子さんが見つめた闘いのページでもある。

裕子さん本人による人生譚は、また米寿の時の楽しみに待つ事としようと思う。

目次

はじめに

長女・未生

一九七九年 創刊号

『絆』 1

一九八〇年 二号

『早鐘をうち鳴らせ』〜二日で納豆一つ〜 16

一九八一年 三号

子産みの歴史、その一 商社の受付の椅子 22

一九八二年 四号

子産みの歴史、その二 道を拓いた若い小さな力 34

一九八三年 五号

五・二三の大きな流れのなかで 〓娘と「ベンセレモス」〓 46

一九八四年 六号

子産みの歴史、その三 「働きつづけたい……」 三人目を授かって 50

一九八五年 七号

子産みの歴史、その四 合併の嵐すぎても 69

一九八七年 八号

はたらくこと 〓片道切符の出向〓 85

一九八八年 九号

潜水艦に友を奪われて 92

一九八九年 一〇号

子産みの歴史、その五 迫られた選択 94

一九九二年 十一号

ソーゴーションシャ 113

一九九七年 十二号

高度経済成長を駆け抜けて、いま 135

二〇〇〇年 一三号

リストラ、私たちの場合 158

二〇〇七年 十四号

傍聴記…兼松男女賃金差別事件 彼女たちが立ち上がった理由 183

二〇一一年 十五号

国連女性差別撤廃条約第六次日本報告の審議に立ちあつて 211

喜寿によせて

孫たちより 231

あとがき

次女・菜生 232

かつて港区にあった中央労働学院のルポルタージュ教室に、私は毎週土曜日の午後、半年間通った。その頃、東京都学童保育連絡協議会の会長であったが、同時に全国学童保育連絡協議会の機関誌「日本の学童保育」(月刊)の編集委員もしていたので、短いルポルタージュらしきものを書く機会があった。自己流ではまずいと思い、一念発起して通い始めたのだった。教室は老若男女の生徒で溢れ、講師は若きドキュメント作家の今崎暁巳の熱意がほとばしるものだった。そのため、講座が終了しても生徒たちは別れ難かった。まずは卒業記念に日本機関紙協会主催の第一回ルポルタージュ・コンクールに応募しようということになったのは一九七八年の年末のことで、今崎先生を囲む忘年会のときではなかったかと思う。コンクールには個人応募ができないため、急速グループを結成し、会報誌として応募することにした。

グループ名は、志は高く大きくと、すこし照れながらも「現代ルポルタージュ研究会」と決めた。メンバーのなかに沖電気指名解雇撤回闘争をたたかっている人がいたため、沖争議団を集団取材させていただき、沖電気指名解雇撤回闘争特集として創刊号を発行した。しかし、会誌を「たたかいのルポルタージュ」としたのは沖電気争議特集だからではない。労働者の目線で労働現場を描くルポルタージュは、さまざまに「たたかい」を励まし、人々を組織する武器になるはずだという思いからであった。

「絆」は私が生まれて初めて書いた長いルポルタージュで、コンクールでは佳作に入賞した。その時、私は三六歳、未生(ミオ)十一歳、菜生(ナオ)七歳だった。

(一九七九年 「たたかいのルポルタージュ」創刊号)

『絆』

一九七八年十月二七日。沖電気工業の全職場で一時間交替のリレー式ストライキが行なわれていた。一七日から数えて連続九日間、そのうち二日の全日ストライキが含まれているという、沖電気労働組合史上では、戦後のレッドパージ反対闘争につぐ大規模な闘いが続いていた。

システム技術部は午前中にリレー・ストを終了し、午後一時から全員仕事についていた。連続ストの影響で誰の机の上にも書類が山積みになっているが、片付ける気力がいまひとつ湧いてこないという顔つきで坐っている。実際に上司に書類を上げても、管理職としての組合対策や職場集会对策の会合のため、ほとんど席を暖める暇もない状態で、いつまでたっても決裁が下りてこないのだ。

八島がふと頭をあげると次長と課長の姿が見えない。黒板の外出先の欄には、次長が本店、課長は電々公社となっている。「おふたりさん、ストが終ってほっとして外出したんだな」と横目でにらんで納得する。明日もまたスト指令が出るだろうから、今のうちにやれるだけ仕事を片付けておかなきゃならないと、自分に言いきかせてみるが、課長に呼びだされ『肩たたき』をやられた場面が眼の前にチラチラ浮んできて、なかなか仕事に没頭できない。

「おい、八島、なんだかヘンだぞ。今度は係長まで外出だつてよ。行先は海上保安庁になっているけどさ。どうもおかしいよ。三人が少しづつずらして出ていったみたいな気がするな。どこかで打合せでもしているんじゃないか。」

うしろの席からFが声をかけてきた。Fは職場集会では首切り「合理化」反対をはっきり主張して職場をリードしている頼りがいのある同僚である。

「気をつけたほうがいいぞ。どうも何かありそうな感じだ。だいたい八島はちょっとノンキすぎる

よ。肩たたきをされているっていうのにサ。」

「うーん。係長まで巻き込んだら、気の毒な気もするなあ。だけど、係長なら僕のことよく知っているから…少しは反論してくれるんじゃないかなあ。」

八島の直接の上司であるK係長は中学卒業と同時に沖電気に入社し、働きながら定時制高校を卒業した苦労人だ。日頃なにかと八島に眼をかけ、仕事を教え込もうとしてくれ、週末になると新橋の赤提灯でちよくちよく飲んだ。K係長は酒が入ると雄弁になって、定時制高校に通っていた頃の苦労話や、ようやく卒業したあと、会社がいつまでたっても高校卒の待遇にしてくれなかったこと、それを自分ひとりで人事課に乗り込んでいって認めさせたら、ア力じゃないかと疑われたことなど、看板になるまで話し込んだこともある。八島にとっては上司というより兄貴のような存在で、はじめて課長から『肩たたき』をやられた時、真先に相談しようかなと思っただ人でもある。

「しかしなあ、時期が時期だから、あんまり期待しないほうがいいんじゃないかなあ。」
Fは首をかしげながら声を落して言った。

はじめての「肩たたき」

八島崇好は八戸工業高校を卒業すると同時に沖電気工業に入社、以来五年間、品川工場のシステム技術部で働いている。漫画を読んだり描いたりするのが好きで、高校時代には美術部に入っていたが、沖電気では、軽音楽同好会でギターを弾いている二二才の現代青年である。

八島が第一回の『肩たたき』をされたのは、ちょうど一週間まえのこと。ちょっと仕事の話がある

からと呼ばれて課長の後をついていくと、広い会議室の中に入り、課長は内側から鍵をかけた。課長の背中を見ながら歩いている時、『肩たたき』されるのかなとチラリと思わないでもなかったが、半分以上は本当に仕事の話だろうという気持ちでついてきていた。しかし、鍵を閉める音を聞いた瞬間、背筋が冷たくなっていき、顔の筋肉が強ばり、余裕をもって笑ってやろうと思っても、うまくいかない。

「君とは今まであまり話したことなかったなあ。今日はざつくばらんに話そうじゃないか。」

タバコに火をつけながら、課長は話の糸口を探すようにゆっくり口をひらいた。『冗談じゃないよ、なにがザックバランだ！部屋に鍵をかけておいて、ザックバランもないもんだ』と八島は腹を立てて押し黙っている。

「私はね、長男やから、そのうち京都に帰らにやなんのや。いつまでも沖にいようとは思っていない。そうそう親をほおってはおけんしな。君は、どない思うとるんかね。」『僕は次男ですし、田舎の家では兄夫婦か両親をみていますから、帰る必要は全然ないんです。』

そのあと、課長は口ごもりながら一般論として合理化をどう思うか、不況を、ストライキをどう思うかなどを尋ね、この際、希望退職に応じた方が惻巧だよと暗に言っているのだが、課長にしても初めての経験で、油汗をかいての任務遂行であり、ついに辞めろとは言えずに第一回は終った。

八島は席に戻ると、書類に眼を落しながら気持ちを鎮めようと努めた。『あれは、やっぱり『肩たたき』なんだろうか。僕だけだろうか。そんなはずはない、ほかにも誰かやられているのだろうか。頭の中をつかみどころのないものが駆けめぐって收拾がつかない。』

『組合の支部委員に報告したほうがいいのか。係長とF君に話してみようか。そうだ、係長ならきつとわかってくれるはずだ。』

結局、八島は誰にも言わなかった。どうにも気持ちの整理がつかかねた。しかし、業務日誌に「三時

半より五時まで一時間半、退職強要」と赤ペンで書きつけ帰宅した。

一五〇〇人の首切り

ことの起りは十月三日付の日経新聞の報道だ。「沖電気、企業体質強化策まとめる」として、一五〇〇人の希望退職募集、品川事業所閉鎖などの合理化案を執行しようとしているという内容であった。

早速、沖電気労組は会社に対し組合を無視して新聞に発表したことへの抗議と中央労使協議会開催の申し入れを行なった。同時に全組合員に向けて「合理化案を出させないためのストライキ権の委譲投票」（下線筆者）を訴え、早くも五日には実施した。

すでに新聞報道されている合理化案が提案されるのは時間の問題と思われるこの時期に、「出させないためのストライキ権」という言葉は奇妙な感じを与えるが、それを打ち消すように組合のビラの中では明らかに合理化絶対反対を訴えている。

五日付沖労組情宣「合理化をハネ返そう」No1では「スト権委譲を高率で達成しよう」と呼びかけ、つづけて「合理化反対闘争は傍観者を許さない。すべてが当事者だ。私さえよければいい」という人がいれば、そこから闘いの後退がはじまる。『ひとり全員のために、全員はひとりのために』が合理化反対闘争の唯一の基本スローガンだ。」と訴えている。

十一日の開票の結果、「合理化提案を出させないための」ストライキ権は八六・六パーセントの高率で確立したが、皮肉にも同じ日、会社側より正式に品川事業所閉鎖希望退職一五〇〇人案を含む合理化提案がおこなわれた。この提案は「希望退職」を募るといふ名目の下に、リストアップされた労

働者に対して猛烈な『肩たたき』を開始するという通告でもあった。

八島に対する『肩たたき』は翌日もその翌々日も行なわれた。「君は始業五分前のラジオ体操をやるのは何故だね。みんなやっているじゃないか。」

「課長、あれは始業前にやりたい人が自由にやればよいという体操でしょ。課長も三ヶ月前までは全然やっていなかったではないですか。」

「君はジープンで通勤しているそうだが、非常識とは思わんかね」

「はい、寮と会社の往復にはよくジープンをはいてますけど、仕事で外出する時は背広に着替えています。ロッカーに置いてありますから。」

『肩たたき』も三度目ともなると、いやな気分は相変わらずだが、返答するゆとりができてきた。課長は大学ノートを見ながら、言葉を探すが、そうそう人生論だけでは時間をつぶすことができないので、日常の細かな話をして退職強要のノルマを果しているという感じである。

はじめて『肩たたき』されて以来、考えつづけてきた疑問を八島は思い切ってぶつけてみた。

「課長、私の解雇される理由は何ですか。」

課長は例の大学ノートを見たま顔をあげず低い声で、一息のみこんだあと答えた。

「君は総合評価がわるい。……君は若いんだし、やめても簡単に職はみつかるやる。」

たったこれだけだった。八島は肩すかしを食ったような気がした。よその職場では大勢の同僚の前で、能率がわるい、私用電話が多い、席を離すことが多い、遅刻が多い、協力的でない——等々、あつたり喚いたりしないからといって、会社の都合で一方的に辞めるといつていることにはかわりない。

八島は態勢をたて直して質問をつづけた。その結果、判ったことは、システム技術部七十人のなかで退職者リストに載っているのは八島ひとりだということだ。対象になった理由は若くて転職可能だということと総合的評価が低いという二点である。そして、リストに載ってしまった以上、希望退職に応じた方が退職金も高いし、再就職も有利だ、いつまでも頑張りすぎると解雇ということになつて、職歴に汚点を残すことになる」と課長は言った。

「まったく冗談もほどほどにしてほしいって言うもんだよ。たしかに朝はギリギリに席に着くが、八時の始業時間に遅れたことはないし、むろん欠勤なんかしちやいない。仕事だつて係長に片腕みたくに頼りにされちゃつて、飛びまわつてやつてきたんだ。たしかに軽音楽同好会や学習会はやつているが、それとこれは別問題だよ。仕事はばっちりやつていた。こんなことは職場のみんなだつてよく知っていることなんだ」と思うと、八島は無性に腹が立つてきた。

「いくらなんでも今日という今日は、職場のみんなに僕が退職強要されていることを話します。労働組合にも報告に行きます。そして、どんなに勧められても希望退職する気にはなれませぬ。」と宣言し、課長より先に立ち上り、会議室を飛び出した。まっすぐにFの席へ行つて、三日間連続で『肩たたき』をやられていたことを話した。そして、業務日誌には昨日と同じように赤ペンで退職強要二時間と力をこめて書き入れた。

係長からの電話

八島の机の上の電話が鳴つた。

「ほら、来たぞ。」うしろの席からFが八島の背中をつついた。「机の上に書類を忘れてきてしまったんだよ。すまんが、新橋まで届けてくれないか。」

やはり係長からの電話だった。次長、課長、係長の相談のうえでの電話なのだろうか、このような事態に陥っているとはいえ、五年間兄貴のように慕ってきた係長には捨てがたい期待を抱いている。八島はこの気持に大きな賭けをするように書類を届けることを引受けた。新橋駅の改札口で係長は青白い顔をいくぶん硬くして、ひとりで待っていた。

「やあ、すまんなあ。今日はもう仕事にならんから、酒でも飲むか、ちよっと遠いが、家まで来いよ。引越しに手伝いに来てくれれば来じやないか。」

八島は人の善い奥さんや、おにいちゃんと呼んでなついてくれる小さな娘たちを思い起し、よし、ついで行ってみるかと思った。

係長は埼玉県の団地に住んでいる。品川工場から、たつぶり一時間半はかかる。途中の乗り換え駅で夕刊を買うつもりで八島が売店に向って歩き出すと、係長はあわてて腕をつかんだ。「新聞を買おうと思って……。」と言いながら係長の顔をみると、はっと手を離れた。

「新聞なんて買わんでいいよ。家に帰ればあるから……。」と言いながら、硬張った表情をなんとか柔げようとしている係長を見て、八島は、最後の大きな依り所が現実の中から消え去っていくのを感じていた。

電車の中で、二人は並んで立ちながら一言も口を聞こうとはしなかった。八島は窓の外の枯茶色の畑を眺めながら、「さっきの係長のあわてようは、いったい何故なんだろう、どこかに電話でもすると思ったのだろうか」などと考えながら、のこのこついてきたことを後悔していた。

「戦線縮小……」

電話をしてあったのか、酒の用意がととのっていた。奥さんが、いつもの人の善い笑顔で「ゆっく

りしていらっしやいね」と迎えてくれると、八島の心もいくらか和んだ。少し酔いがまわってくる
と、係長は幾度も繰り返し言った。「こんな大事なこと、オレを通さないで、課長が直接おまえに言
うなんて、ひどいよ。きつと通してくれと頼んでいたのに……」

八島への退職強要を怒るのではなく、自分の頭越しにやられたことへの不満ばかりがつのっている
ようだった。「しかし、なあ、八島、オレも定時制高校を卒業して苦労した身だ。おまえの悔しい気
持ちはよくわかるつもりだ。おまえのために言うんだよ。長い人生を考えると、今やめといたほうが
いいと思うがなあ。」

八島は、おまえのなことを思つてと、誰から言われようとも、希望退職には絶対に応じないという決
意を、三回の『肩たたき』のなかで固めつつあった。八島は黙って飲むしかなかった。

「おまえが、いろいろなこと首を突込んで、マンガを描いたり、ギターを弾いたりしているのは知
っているが、まさか、何とかいっておかしな学習会には行つてないんだろな。」

「いや、あそこは僕の知らないことを学べるから、時々顔をだしていますよ。だけど、それが今度の
ことと関係あるんですか。」

「まずいなあ、あの学習会にまで首を突込んでいたのか。そうなると、いよいよオレの方も戦線縮小
せんとならんなあ。」

八島は戦線縮小してなんですかと問い返えそうとする言葉を呑み込んで、再び沈黙した。八島の期
待は、決定的につぶれてしまった。「戦線縮小」って、いったい何のことだろう。自分の弟のように
面倒見てきたのは、K係長にとつては「戦線拡大」のためにすぎなかったのか。縮小っていうのは、
切り捨てるという意味なのだろう。Fが言ったとおり、俺はほんとうにノンキなお人好しだ、のこの
こと埼玉あたりまで来ちゃって……。ビールを飲んでも、飲んでも「戦線縮小」「戦線縮小」とい
う係長の言葉が、こだまのように耳の底で鳴っている。係長もあえて口を聞こうとはしなかった。黙

って下を向いて、ひっくり返るまで飲みつづけた。

翌日、娘たちにせがまれて団地の砂場で遊んだり、家の中でゲームをしている八島に、係長はもう何も言おうとはしなかった。妻の折込み広告を折る内職を黙って手伝いながら、時々八島と娘たちの遊ぶ様子に眼を向けはしたが……。

「では帰ります」と言い出すキツカケが見つからず、子ども達の遊び相手をしている八島は心の奥底から湧いてくる重苦しい寂しさ・みじめさと懸命にたたかっていた。"K係長でさえ頑張って残れよと言っではくれない。俺がこんなことは不当だと何回叫んでみても、分つてくれる人が何人いるかわからん。たけど、そんなことばかり気にして、シッポを巻いて辞めるなんてことはやっぱりできない。だいたい腹の虫がおさまらないよ。"

八島が帰ると言うのと、係長はバス停まで送ってきた。ずっと無言である。バス停でバスを待っている間に、係長はやっと口を開いた。

「おまえのためなんだ。届を出したほうがいいぞ。」ここで、八島は寂しさやみじめさを完全にふっきた。こういう自分の辛さをひとつずつ乗り越えていくことが、たたかいなのだろうと思った。

「どうも、いろいろご馳走さまでした。僕は、やっぱりやめません。最後まで頑張ろうと思いません。」

指名解雇

十月三十日。会社側は正午で希望退職を締切った。わずか二十日たらずの期間に千六十名が希望退職に応じてしまった。その間に行なわれた『肩たたき』は部外者では想像すらできないような激烈な

もので、ついに自殺者を出すに至った。

希望退職申し出の締切り時間が過ぎると、八島は肩の荷がおりたようなホツとした気分になった。

“よくまあ、あの嫌味な『肩たたき』を頑張ってきたもんだ。これでもう『肩たたき』もおしまいだ。さて、明日から会社はどんな手で行くつもりだろう”このあたりが八島の若さであり、甘さであり、誰からも好かれる朗らかさなのだが、たしかにひとつの大きな山を越したのは事実であった。

しかし、その山の向うに幾つの峻嶮な山があるのだろうか。八島は退職強要をされて以来、いくども田舎の父ちゃんに手紙を書きかけては途中で投げだしていた。“こんな複雑な状況を書くなんて、誰にもできやしないよ。なまじ書けば、父ちゃんを心配させるばかりだ。早いとこ、いちど帰って自分の口で説明するのが一番だ。”と思っているのだが、やはり田舎の両親になにも知らせていないということは、たえず頭の片隅にひっかかっている。

一九七八年十月三十一日の朝、退職強要に屈しなかった約三百名の労働者に対し「解雇通告書」が突きつけられた。

この朝、通告書がさまざまな形で職制から三百人に対して突きつけられた。ある者は課長に呼びつけられ、解雇通告書を読み上げてから渡された。ある女性は出向先から本社に呼び戻され、着いたとたんに、この通告書が渡された。

システム技術部では、朝のひと仕事に片がついて、多くの人が工場や取引先へ外出したあとの人気

通 告 書

被通告人

横浜市緑区榎が丘六ノ一 沖電気青葉台寮
八島 崇好 殿

通告人

東京都港区虎ノ門一ノ七ノ十二
沖電気工業株式会社
取締役社長 三宅 正男 印

記

すでに御説明申し上げた通り、当社は人員合理化を実施するのやむなきに至り、遺憾ながら貴殿に退職願わねばならないこととなりました。

ついては、退職申出期限を昭和五十三年十一月六日正午までとし、それまでに貴殿より当社に対し退職の意志表示をされた場合には、希望退職扱いとし、昭和五十三年十月十七日付で発表した希望退職条件による退職金を支給致しますので、別送の退職届により当社総務課（本店は人事課）宛御申出下さい。

右期限までに貴殿より退職の申出なき時は、この通告を以って、就業規則第七十四条第七号の規定により昭和五十三年十一月二十日付にて貴殿を解雇致します。（後略）

のない静かな午前十時頃、課長が八島の席に後から近づいてきて、八島の肩越しに「これ」と言いながら手渡そうとした。

「いりません。」予期していたことなので、落着いてゆっくり言うことが出来た。「いや、読んでおいたほうがいいよ。」課長は八島の机の上にそっと置いて自分の席に戻って行って、書類をひろげた。八島はゆっくり立ち上って、課長の机まで歩いてゆき真正面に立って言った。

「これは受け取れませんので、返します」

課長は硬い表情で書類に眼を落したまま、八島をまったく無視するポーズをとっていたが、八島は課長の机の上に通告書をキチンと置いて席に戻った。

職場を追われる日

指名解雇が通告された翌日の、十一月一日、労組中央闘争本部はスト権の再投票実施を決めた。その理由は「……今までのスト権は「提案を出させないためのスト権」であったが、この権限は指名解雇がでてしまった現在の段階では有効でない。……」というものであった。この中闘の説明は非常に説得力に欠けている。合理化提案があったのは十月十一日で、スト権の確立した日であった。それ以降、十波にも及ぶストライキをうっているのは、提案された「合理化」そのものに反対だったからではなかったか。

十波のストライキにもかかわらず、なんら成果をあげることかできず、千名を超す「希望退職」者を出してしまって、敗北感が生まれつつある状況のなかで、二回目のスト権投票が実施された。

中闘は投票を呼びかけるピラで「……現状打破には、より強烈的、しかも長期的、連続的なストライキで対処しなければならない。」

(中略)さらに、この闘いのためには、相当な資金が必要であり、現在の闘争資金では不足する場合もありうる。……」となかば脅しのような訴えをしている。会社側の干渉も激しかった。

(結果)

総投票数	一一、二八五
有効投票	一一、二五五
賛成	二、八六六
反対	八、一四二
白紙無効	二七四
賛成率	二五・四%

不成立であった。

そして、十一月二〇日、最終日である。八島は「指名解雇されましたので・・・」なんて挨拶して歩くのは、やっぱりカッコわるいじゃないあと思ひ、はっきりしない気分で寮を出た。しかし、明るく挨拶をしようというのが、退職強要をたたかってきた者同志の申し合せだった。

八島は、まずクラブの仲間のところへ行つた。軽音楽同好会の仲間のところへ、ウエイトリフティング部では会計を担当していたので、挨拶がてら帳簿をもつていった。「がんばれよ」と二人や二人は言ってくれるだろうと期待していたが、みな困つたような笑いを浮べるばかりである。しかし、そりやそうだろ、俺だって、立場が逆だったら、課長や係長の前で「がんばれよ」なんて言う勇氣が出るかどうか、自信はないものな、八島は自分にそう言いかけながら挨拶して歩いた。そして、最後にかならず「明日の朝、門の前で会いましょう。」とつけ加えた。

もう挨拶廻りは終わりにしようと思つて廊下を歩いてみると、関連会社の課長とばったり会つた。「あ、う……私今日付けで解雇されたのですが、全く納得できないので……」八島が挨拶をしかけると、

課長はしばらく意味がわからず、八島の顔を見つめていたが、気がつくと自分のライトバンの中で話そうと言い、腕をひっぱるように連れていった。

「こんなに若いのに、やめさせるなんて、いったい、どうして……」

「私にも、どうしてなのかわからないですよ。遅刻も欠勤もしてないにいいし。」

「イヤイヤ、遅刻や欠勤をしなくても、仕事もしないという人はいるにはいるよ、けどなあ、あんたはよく働いていたのになあ。そういうえば、芝浦でもよく働いていたのに共産党だとか言われてクビになった人を知っているよ。しかし、わからんものだねえ。会社はいったい何を考えているのかねえ。」

父ちゃんの言葉

割引料金になる夜八時を待つて田舎に電話をかけた。百円玉を二千円分用意してピンクの電話に向った。古い和菓子屋を継いできた父親は、会社勤めの経験はまったくない。まして労働組合など別世界の言葉だ。わかってくれるだろうか、なんとも自信はないが、今までのことをできるかぎり分りやすく説明した。父ちゃんはフンフンという調子でほとんど何も言わずに八島の話の聞いている。

「それで、崇好！勝ち目はあるのか？」

「時間はかかるかもしれないが、勝ち目はあるんだ。あるからやるんだよ。」

「そうか、勝ち目があるんだら、最後まで頑張れや、からだに気いつけてな。そいで、すこし暇できたら一度帰ってこいや、なっ。」

八島はぎやあっと叫び声をあげたいほど嬉しかった。父ちゃんが、わかってくれたよと、みんなに言いたかった。

田園都市線の電車の中で、父ちゃんの声を思い出して涙が溢れてきた。あわてて汗を拭くふりをしながら拭いても、拭いても、あとから、あとから溢れてくる。青葉台の駅から寮に向う道を涙流しながら歩いた。八戸の夜空みたいに星が輝いているなあと思いがら。

沖電気の指名解雇に納得できない六〇数人の労働者は、ただちに沖電気指名解雇の撤回を求める争議団を結成し、解雇を撤回させ職場に戻るまで団結して頑張ろうと、港区に争議団事務所を構えた。現代ルポルタージュ研究会としては、どのような形で支援ができるのか話し合い、争議団の機関紙に毎号かならず会員の誰かがルポルタージュを書くことで支援をしようとした。毎日のように会員の誰かが潮見坂を登り切ったところにある争議団事務所を訪問し、そこで若者たちとご飯を食べ、ときには愚痴も聞き、すこし人生経験が長い分だけ意見を言うこともあった。そして毎号の機関紙に争議団の若者の日常を伝えるルポルタージュを書いた。これはそのような支援活動のなかで生まれた作品である。

(一九八〇年「たたかいのルポルタージュ」第二号)

『早鐘をうち鳴らせ』〜二日で納豆一つ〜

現代ルポルタージュ研究会の仲間、橋本さんは大きなシヨックで、ひと晩眠れなかったという。それは私がちよっと深刻な顔で話したある出来事のためである。

その話というのは、今の沖電気争議団では格別めづらしいことではないのかもしれないが、いまも蕨市にある沖電気独身寮に留まり、沖電気争議団の一員として頑張っている藤原君が、二日間に納豆

一箱しか食べられなかったという話である。ついに財布の底をついてしまったのだけれど、親兄弟に泣きついていける状況ではないし、争議団の台所も火の車のようで言い出しかねて、藤原君はだまっで空腹を抱えて活動資金の確保のための行商をつづけていた。二日目の夕方、どうにも我慢ができなくなつて事務所のガラ空き冷蔵庫にたった一つ残っている納豆を食べてもいいかと、事務局に断つて食べている時にも彼は何も言わなかった。

藤原君がこの二、三日元気がないのに気付いていた事務局次長の松本謙司さん（通称マツケンさん）が、わざと乱暴な口調で声をかけた。

「藤原、おまえ、金がないんじゃないかねえのかい」藤原君は顔をあげ、ちよつと間をおいてうなずいた。

「おまえ、なあ、金がなくなつたら、なくなつたつて言いに来なくちやだめだよ、なんでも事務局に言ってくれよ、な、な、」

マツケンさんはそう声をかけながらも、もうちよつと早く氣ついてやりやあよかったなと、考えていた。「うちの会の若いもんは、バカの字がつぐほど真面目で正直なヤツが多いから、俺らのところで、ちゃんと見とかなきゃいけないのよな。財布のなかが十五円になつても、黙つて行商に行くんだから……」

じつは、この二日前に、藤原君は七百円でカツ丼を食べていた。それは、現代ルポ研の橋本さんか「沖電気争議団を支援する会」の機関紙に記事を書くため、藤原君の行商活動を一日中追いかけて取材していた日のことである。その日は年内に仕入れたものを売り切つて、すこしでも越年資金をつくりたいと飛びまわっている藤原君と影山君の二人を橋本さんはずっしり重いカメラを肩にさげて必死に追いかけていた。夕方には三人ともすっかりおなかをすかしてしまい、通りすがりの食堂に入っ

て、三人そろってカツ丼をたのんだ。橋本さんは自分が年長だし取材をさせてもらったのだし、ご馳走しようかなと思っただけれど、青年の誇りを傷つけてはいけなと思ひ直し、結局、割りカンにすることにした。その時、藤原君の財布には七百十五円しかなくて、カツ丼の代金を払ったら、残金か十五円になったとは、橋本さんは夢にも思わなかったという。

私にとっての沖電気

首を切られた人たちが楽天的に明るく闘っているからといって、数ヶ月も前に雇用保険は切れ、七一人という大世帯の争議団がラクなはずはない。けれども、私自身しばしば争議団事務所をのぞいているにもかかわらず、そんなに経済的に切迫したところに至っているとは気づかなかつた。支援する会の会費を納めて、わずかばかりのカンパを職場で集めて届けることで、ことを済ませていた。

私にとって沖電気の指名解雇撤回の闘いは何なのだろうか、支援するということは、どういうことなのだろうか、沖電気争議団の経済的な苦境もさることながら、みずからの触角の鈍さを突きつけられて、橋本さんと同じようにショックを受けている。そして、今つよく感じている。

火の見やぐらに駆け上り、たくさんの働く仲間に向けて、早鐘を打ち鳴らす時だ。その鐘を打つのは誰か。それは、沖電気資本によって不当にも首を切られた人びと自身や、いま沖電気で働いている仲間であると同時に、たとえば現代ルポ研の橋本さんであり、私でもあるのではないだろうか。

「世間では沖電気は全国的に支えられて、恵まれた状況のもとで闘っていると思っているのよ。もっとほんとうのところを、今まで光を当てていない部分を、押し出していかなきゃいけないんじゃないの。苦しいときは、苦しいって大声で言わなきゃあ。」

私はこう言わずにはいられなかった。マツケンさんは困ったように笑いながら言った。「いやあ、

まいったね。苦しい状態だつて何度も言っているのになあ、伝わっていないんだよな。ほら『はたらく』（支援する会機関紙）にも載せているんだよ」

夫婦とも首切られて

マツケンさんのところは、夫婦二人とも首を切られた。六畳一間に小さな台所のついているアパートの二階に長女秀子（五才）長男豊（三才）と四人で住んでいる。狭いけれど家賃が二万円と格安なので引越せないでいる。妻の和子さんが言うには、それでも上の娘が学校へ行くようになるまでには、机のひとつも置けるアパートに移りたいと、安月給をやり繰りして引越費用を貯めてきていた。首を切られた時の沖電気の賃金は、松ケンさんが三十三才で手取り約十二万円、和子さんは三十二才で約十一万円だった。とても「共働きは贅沢だ」といわれるような優雅な共働きではなく、引越費用を少しづつ貯めるのがやっとの生活であった。首を切られたあとも、この引越貯金には、できることなら手をつけたくないと思つたとしても、それはごく自然の感情である。来年の春には長女秀子の入学が迫っているのだから。

引越貯金を取り崩して

一九七九年九月で、夫婦二人そろつて雇用保険が切れ、その後の十月、十一月は争議団からは毎月二万円支給された。支給額は自分で申請する困難の都合によって調整されているので、かなり、まちなちのようだから、事務局次長のマツケンさんがいつもの調子で「うちはなんとかなるさあ、ねえちやん（どういいうわけか、和子さんをこう呼んでいる。）が、どこから借りてくるだろ、争議団の借金は増やさないほうがいいよ」なんて言つた結果なのかもしれない。和子さんにしても、争議団が今

どうしても乗り越えなければならぬ一つの山場を迎えていると思うから、決して異存はないのだが、やり繰りの担当者としては不安が残るのだ。

「いくら節約しても、結局、月に十万円はおろしちゃうのよね。それでも、うちは公立保育園に二人とも行っているから、なんとかなっているけど、東田さんとこ（こも夫婦そろって首を切られた）は、ほんとに大変だと思うわね、子ども三人のうち、下の赤ちゃんは無認可だから赤ちゃんの保育料だけで四万円はかかっているんじゃないかしら」

私は思わず、ぶしつけにも毎月十万円ずつ引越貯金を取り崩して行って、あと何ヶ月もつのか尋ねてしまった。和子さんは、特徴のある勝気そうな大きな目で、ニヤツと笑いながら、軽い調子で答えてくれた。「そうね、五ヶ月か、うまくやれば六ヶ月もつかない、でも、まあ、それまでは行商活動も軌道にのるだろうし、支援する会の会員も、増えていると思うけどね」

「でもねえ、年越しはやつとのことだったですわね、ボーナスが出たからって松本の弟が送金をしてくれて、ほんとうに助かった」

広島にいるマツケンさんのお母さんも、とても心配している。わざわざ電話してきて、様子を尋ね「近ければ、あまつたおかずに届けてやれるのにねえ」とため息をつかれたとか。

保育園のクリスマス会で

秀子ちゃんと豊くんの通っている保育園のクリスマス会の朝、和子さんは大きな包みを自転車の荷台につけ、始まる一時間も前に保育園に着いた。ホールの入り口付近に、小さな子どもたちの椅子を並べて乾シイタケの袋を並べ始めると、支援する会の会員になってくれたこの保育園の園児の母親二人が手伝いに駆けつけてきた。乾シイタケは、年末の行商活動でいちばん残量の多い商品である。ブ

ランディやシクラメンの鉢は予想以上の売れ足の速さだったが、正月を控えてもっとも売れそうだと見込んで大量に仕入れた乾シイタケは、どうもはかばかしくない。他のものを全部売り切ってしまったも、これはたくさん残してしまっただけは利益が生まれないからと、みな必死で取組んでいる商品である。

開始三十分钟前、「許すな！ 沖電気の首切り」と書いてあるゼッケンを胸につけてホールの入口に立った。保育園でゼッケンをつけるのは、はじめてのことだった。

「あら、あなた沖電気だったのですか。ちっとも知らなかったわ」

「一つもらうわ。オツリはカンパするわよ」

「頑張ってくださいね」
みんなの反応は、想像していたよりずっとよかった。わずか三十分の間に千二百円の乾シイタケが十五袋も売れ、オツリをカンパしてくれた人も何人がいた。温かいものがたしかに伝わってきた。

ゼッケンをつける時、クリスマス会が始まったら外そうと思っていたのだが、三十分、乾しいたけを売っている間に気がかわった。

外すのがとても勿体ないように思えてきて、最後までつけていた。そして、そのまま家に帰ってきた。暖かなものをゆっくり味わいながら。クリスマス会で販売活動したいと頼んだら、さっそく園長にかけあってくれた父母会の会長さん。黙って見なかったことにしてくれた園長先生。手伝ってくれた保母さんたち。ありがとうと心のなかで呟いた。

「こういう日はね、支援する会の会員をいくらでも増やせるような気がするのよね。たたかいたが、いくら長引いたって大丈夫だと思えるしね」

この日、和子さんをつつんだ温かなものを私たちがどれだけ大きく、深く、たしかなものに育てることができるか―― 私たち働く者の力のためされる時ではないかという思いが、突きあげてくる。

第三号では、そろそろ自分の職場を描こうと思った。これまでと違って、登場人物を仮名とした。人物を仮名にすることについて現代ルポルタージュ研究会の内部では喧々諤々の議論になった。たしかにルポルタージュはフィクションではなく、事実を作者の目で切り取って読者に提示するわけで、仮名にした時点でルポではなくなるといふ説が強かった。

私は何と言われようとも職場の「運動」(たたかい)にマイナスになることはしないと頑張った。掲載した会誌を職場で百冊ちかく販売していたから、そこはどうしても譲れなかった。でも今になっても正しかったのかなと思ひ、結論が出せていない。

まだ共働きが珍しい時代、ましてや子どもを産んでも働き続けているのは、いわゆる活動家と呼ばれた女性たちだけだった頃に、秘書室という特権階級のような部署で女性が産休をとった。これは「たたかい」である。ふつうのOLが産休を取る時代がやってきたという嬉しさもあって、私が取材をお願いすると快く引き受けてくれた。

(一九八一年 「たたかいのルポルタージュ」三号)

子産みの歴史 ― その一 ―

商社の受付の椅子

「ごぶさたしてますう。寺田ですう。牧さんお元気でいらっしやる？ アノネ、今朝、女の子が生まれたのよ、お蔭さまで、とっても安産で、助産婦さんからも褒められたの……………」

午後いちばんの電話の声の主は寺田陽子で、相変らずのソプラノ、語尾をさらに高くあげて伸ばす

調子も、すこしも変っていないかった。大きな眼をクルクルさせながら、ガウン姿であちこちに電話をかけている陽子の様子が直かに伝わってくる。今朝、出産したばかりとは、とても思えない、張り切って明るい声であった。

「出社したら、先輩ママとして、いろいろ教えてくださいね。お仕事にお邪魔してごめんさいね。ミセスの会のみなさんに、よろしく……」

短かな、つむじ風のような電話だったが、たしかなもの運んでくれた。役員室フロアの受付嬢として会社重役のアイドルのような存在の陽子の爽やかな決意の表明である。産休が明けたら、ふたたび職場に戻って、働き続けることへの決意であった。

一九七六年七月十五日、大手商社の一つである阪神物産に一五番目の母親労働者が誕生した日のことである。

ニューフェースからOLへ

寺田陽子は一九四六年八月、八人兄妹の七番目として疎開先の群馬県で生まれた。しばらくして一家は東京に戻り、下町の南千住（荒川区）に居をかまえた。陽子は、その地で小学校、中学校に通い、下町っ子らしく踊りの稽古に励みながらのんびり育った。

高校二年の時、兄のすすめで日活ニューフェースに応募し合格した。「撮影所を一度見てみたかったから」というのが応募の動機だったが、合格するとこのチャンスに賭けてみたくなった。高校には一年間の休学届を出し、ニューフェースとしての特訓を受けることになった。映画史、音楽、体操などのレッスンのほかに劇団民芸にも演技の基礎訓練に通い、最終審査を通過して待望の撮影所入りをした。「愛と死を見つめて」や「成熟する季節」などに「ちよっとした役」で出演したが、芸能界と

いう特殊社会のなかで、平凡な結婚生活の難しさと大切さを知って、復学を決意する。穴戸錠に高校だけは卒業したほうがいいと言われたことも決意するきっかけになった。かつての同級生より一年遅れて復学すると、ノンビリ屋の陽子が一変して、猛烈なガリ勉優等生になった。それがなぜなのか、自分でもよくわからない」と言う。

一九六六年、阪神物産に入社。秘書室に配属され、役員室フロアの受付嬢となった。一生懸命とめて皆さんから可愛がられよう、けっして笑顔を絶やすまいと心に決めていた。少々いろは黒いが、大きな瞳の愛らしい顔立ちと下町育ちらしい愛嬌のよさから、年配の役員たちに可愛がられ、訪れる他社の重役からも気軽に声をかけられた。

「寺田さん、元氣かね。今日は君に会えたから商談がうまくまとまるよ。君に会うと縁起がいいのだよ。」某メーカーの重役が受付に寄ってひと言、いい残して応接室へ向うときなど、陽子はその後姿にていねいに頭を下げながら、胸のうちに湧きあがってくる嬉しさを味わっていた。「私の誠意が、たしかに相手に伝わっている。私を会社の顔と言ってくれる人もいる。私も商談がうまくいくためのお手伝いをしているのだ」そう思い、誇らしい気持になった。

夜学に通い始める

就職先に商社を選んだのは「海外駐在員夫人になって外国で生活することに憧れた」からで、その夢を実現するために、茶道、華道、料理の教室に通い「売りやすい条件づくり」に励んでいたが、受付という仕事が陽子の性に合って、いつの間にか「話があっても売らずに」五年が経過した。

受付の業務一筋に五年もたつと、学びたいものが自然に変化していった。一念発起して、ロゴス英

語学院夜間部に入学した。外国人の客が増え、不自由を感じていたこともあったが、それだけでなく、自分の中身を充実させたいという気持が強くあった。それからの二年間、毎晩休むことなく通いつづけた。昼休みも予習復習の時間に当て、ちょうどニューフェースから高校へ復学したときと同じような大変身であった。

その頃、労働組合婦人部から婦人委員をやってみないかと声をかけられた。それまで労働組合にそれほど関心をもっていたわけでもなかったが、引き受けてみた。職場の同僚から見ると、陽子の生活パターンが突然変化したように見えたが、陽子自身にとっては自然のなりゆきでしかなかったと言ふ。しかしこの頃から陽子の見渡せる世界がひろがり、ガラスの城のような役員室フロアから突き抜けたことはたしかなようだ。

陽子は婦人委員を引受けはしたが、婦人部の学習会で母性保護の勉強をしても、あまり馴染めなかった。『がんばろうって人はがんばればいいわ、そのための協力ならする。でも私は共働きなんてしたくないし、まして子どもが生まれてまで働くなんて考えられない。子どもやダンナ様が可哀想よ』と思っていたし、そんなふうに発言もした。この発言は、当時の阪神物産に働いている女性の九五パーセントを代表するといってもよいものであった。それだけに婦人部は職場に網の目のように学習会をつくり、働きつづけることのできる職場環境と労働条件の話しあいをしてしようとしていた。

ミセスの会に出会って

英語学院に通いつづけているうちに、上級クラスにいる「背が高く、外人みたいにハンサム」な青年にプロポーズされた。商社マンとは違った真面目さ、素朴さ、誠実に魅かれた陽子は、学生と〇しと主婦の三役をこなすことになった。彼のすすめと経済的理由もあって共働きに踏み切った陽子

が、結婚休暇のあと出社しはじめるの間もなく、ミセスの会の集いに招かれた。それまでミセスの会の存在すら知らなかったが、出席してみると陽子の歓迎会が計画されていた。それからは毎月の集まりが待ちきれないほど楽しみになった。無水鍋の講習、有害食品の勉強、手早くつくる朝食のアイデア交換、女性の健康管理にはじまって避妊の勉強会まであり、集ってはしゃべり、ときにはノロケ、時にはグチをこぼしあい、ほんとうに楽しい会であった。ここで、つきあいがひと廻り大きくなった。

このミセスの会でも、子どもの話となると意見は大きく分かれた。妊娠したら退社して自分の手で子どもを育てようというグループとなんとかして働きつづけたい、そして子どもも立派に育てたいグループの二つである。もちろん陽子は「絶対にやめよう」と思っていた。だからこそ、二年間は子どもをつくらないで、彼との生活を楽しんだ。結婚記念日の一年目はハワイ、二年目は京都へ旅行して、三年目に予定どおり妊娠した。陽子は妊娠とわかるとすぐ、口頭で上司に年度末には退社したいと申し出た。

やっぱり働きつづけたい

「子どもができましたので、三月いっぱいまで辞めさせてください。」と言葉にした瞬間から陽子のなかに後悔の思いが湧いてきて、抑えることができなかった。業務引継書を書き始めることで気持ちを落着かせようとしたが逆効果で、自分のなかにある心残りが、いっそう鮮明になるばかりだった。

「社会で一流といわれる人たちとの緊張した触れあいのチャンスも、これでもう無くなるのだ」と思うと、たまらなく淋しくなった。

そんな思いをひきずったまま帰宅した陽子は、思い切って夫に自分の気持ちを打ち明けると、意外に

も「働き続けたいなら、がんばってみたらいいじゃないか。世の中の刺戟をうけて、いつまでもきれいでいてほしいからね。できるだけ協力するよ。」という言葉が返ってきた。夫と子どものために家庭に入るのが当り前と思いつ込んでいたのは陽子だけで、半官半民の職場で同僚のほとんどが共働きという環境の夫にしてみれば、そんなに思いつめるほうが不思議なことであった。やれるだけやってみればいいじゃないかという、いとも自然で気張らない考え方だった。

翌日、陽子は出社するとすぐ、ミセスの会の世話人に相談をもちかけた。「主人があなたの今までの努力を評価しているからこそ、そう言ってくれるのだと思うわ、ぜひ頑張ってみたら」

秘書室の若い同僚にも意見をきいてみた。「心細くなっちゃうから、やめないで、がんばってください。応援しますから」

陽子はおおいに励まされたが、いちど退社を申し出ているだけに、それを撤回して働き続けたいと言いつたには大きな勇気が必要だった。悩みながら一日が過ぎ、ついに言い出せないまま帰途についた。日暮れのはやい冬の帰り道、家庭もちの女たちは小走りに駅へ急ぐ。駅前の交叉点で、偶然ミセスの会の仲間に会った。ひとりには新婚早々で労働組合の婦人部長をしている。もうひとは二人の子どもを保育園にあずけて働き続けている大先輩であった。陽子はチャンス到来といばかりに二人を道の端にひっぱっていつて悩みを打ち明けた。

ささえてくれた仲間たち

「正式の退職届を出したわけではないから、大丈夫、取り消せるわよ。今までにも、そういう例はあったもの、それで、もし、やめたくないのに、やめなさいって言われたら、署名集めでも、なんでもして応援するわよ。がんばって。」

陽子は今でもこの言葉を忘れることができない。悩み抜いていた陽子は、二人のこの言葉のお蔭で、どれほど勇気づけられたことか、昨日の出来事のように鮮やかに、そして感謝の気持をいっばいに語る陽子をみていて、私は、その二人に当時を思い出してもらうことにした。

陽子がすっかり心を決めることができた道端での立話は、小一時間ほどで、そのほとんどの時を陽子自身が話していたという。自分自身の悩み、夫のこと、同僚のこと、上司のこと、そして陽子自身がどんなふうに通っていたか、受け付けの仕事をやるうえで、どんなに気を遣ってきたか、またそれを認められた時のうれしさと、そういう生活から離れてしまうことの淋しさを語りつづけていたという。

「私たちは、ただ寺田さんの話をきいていただけで、そんなに説得や激励をしたわけではなかったのよ、私たちが聞いているあいだに、彼女自身で結論を出していったの。」私たちの影響だなんて、そんな大袈裟なものではないと、当の二人は謙遜する。今ではひとり二人の子の母、もうひとは三人の子の母と、二人とも当時よりさらにたくましい働く母となっていた。

新しい職場でのプロ魂

八週間の産後休暇が終り出社すると、陽子は新しい職場へ異動となり、一階の正面玄関の受付になった。同じ受付でも役員室フロアの受付と正面玄関とは、仕事の中身が大きく異なった。役員室フロアでは、応対する相手はほとんどが一流企業の重役やその秘書たちである。しかし一階の正面受付となると、そんなキレイごとばかりではすまされない。

たとえば物乞いなども来る。男も女もいる。初めのうちは静かにもっともらしいこと言っている

が、そのうち、どうも不得要領で、おかしいなと思ひ始める。隣にいるパートナーに、なんとかそれを伝え、警戒しながら聞いてみると、かならず最後には金の無心となる。断ると百円でもいいからと言つて粘つたり、涙をみせたりすることもある。パートナーが、そつと警備員に連絡してくれるまで、周囲の空気を乱さないように、穏やかにこやかに対応しながらも決して「ビター文」出さないのだそうだ。

「こういう人が来ると、ほんとにイヤになるわ」と陽子は言うが、それほど苦にしているふうでもない。「決してビター文出さないのよ。出してはいけないのよ。」という時などは、自信にみちて胸を張つて仕事をしている陽子の姿が彷彿とする。

アポイントをとらずに飛び込んでくる外国人もいる。英語の下手な外人だっている。そんな場合でも、なんとか目的を聞き出し、どこに紹介すべきか、受付で判断しなければならぬ。東京本社だけで三二本部ある。その下に一五〇の部と約七〇〇の課があつて、四千人の人たちが働いている。取締役以上の役員だけでも四五人もいる。建物も五つのビルに分かれている。そのなかから、客の望むところを短時間に判断し、案内しなければならぬ。

フランス語なまりの強い英語を話す黒人が尋ねてきた。とくにアポイントはとつてないという。身振り手振りを混じえて話したところアフリカのガボンという国から来て、パイプの話をしたらしいことが分つた。パイプとは鋼管のことである。しかし困つたことに鋼管を扱っている部署は、陽子のいる日本橋のビルから、もつとも離れている大手町のビルにある。咄嗟の判断で社員の使う都内巡回バスを利用することにした。バス乗り場まで案内しながら、これは社員用のバスだから、無料で大手町のビルの前まで行けることを説明し、バスの中にある社員には大手町の鋼管部に案内してほしいと頼んだ。その日の夕方、その黒人と話をした営業マンから、彼がとても喜んでたという電話がかか

ってきた。

トイレでの母乳しぼり

「こんなことは十年選手だからこそ出来るのよ。入社一、二年の人にやれと言っても、それはやれという方が酷よね」陽子は受付という仕事に喜びと誇りをもっているが、役員室フロアから一階の正面玄関の受付に移った時、周囲の人びとはさまざまな憶測をした。「嫌がらせ人事だ」とか「子持ちじゃ続かないんじゃないか」とか「いつまで頑張りつづける気なのか」など。そんな空気を感じたこともあったかもしれない。けれども陽子はそれまでどおり、顔見知りの客があれば、ひとこと健康の具合を尋ねたり、気候の挨拶もし、初めての客には笑顔で親身になって接する。そして休憩時間になると、まさしく矢の如くトイレに飛び込み、母乳をしぼるのである。

母乳を与えたいと願っても、働き始めると途端に止ってしまう人が多いが、陽子はゆたかな胸からそれに比例するように豊かな母乳がでて、一年ちかくも休憩時間を「乳しぼり」に費さなければならなかった。これは経験者でなければわからない辛さだという。しかし受付の席について、しゃんと背筋を伸ばし、きれいにセットした髪と大きな瞳の陽子を見て、来客の誰ひとりとして休憩時間に乳をしぼってきたばかりだとは思わなかっただろう。ただ母の会の先輩たちだけが、そういう努力を重ねて朝夕母乳を飲ませつづける陽子に惜しみない拍手を送っていた。

産休明けでの職場の異動、初めての子育てと馴れないことばかりのとき、まして子どもが熱を出したりすると「なぜ、これほどまでして働き続けているのだろうか、子育てに専念したほうが良いのかもしれない」と葛藤する日もあった。そんなとき陽子は「母の会」の集まりにいくと、働く力が自然に湧いてきたという。

「母の会」も陽子を迎えて活気づいた。「離乳食の工夫」「むし歯の予防」「指しゃぶり」「予防接種」「保育園と父母会」「自立と自律」「嫁と姑」……話しあうテーマにこと欠くことはなかった。

二度目の産休

一九七八年七月のある日、顔見知りの顧問に気づいて陽子はいつものように立ち上って会釈した。目立たないように工夫をこらしても、すでに九ヶ月になろうとするお腹は、どうしてもせり出してしまふ。二度目の出産のために、あと半月で産休に入るといふ時期であった。顧問は、オヤツといふふうに関をためて、「大事にしなさい」と言葉をかけて通りすぎていった。そしてその翌日から産休に入るまで、陽子は受付に出ないで、控室で簡単な事務整理をすることになった。陽子は親切な顧問が一階はとくに冷房がきついから配慮してくれたのだと信じている。ほんとうに、そうなのかもしれないが、「あんなに大きなお腹の人を受付に出すなんてみともない」と顧問が総務部にねじ込んだらしいという噂もささやかれた。そんな噂を知ってか「あの時立ち上がらなければ分らなかったのにね」と陽子は笑いながら言う。

その顧問はまったく気づかなかったのだけれど、その時陽子の隣に坐っていた沢木明子も妊娠六ヶ月であった。さらに陽子の産休中の交替に決っている山田も三ヶ月であった。この時期は、ひっこめでも、ひっこめでもお腹の大きな受付嬢が登場してきた。

労働省の調査では勤労女性のなかの既婚者の比率は六〇パーセントを超えている。しかし「総合商社」と呼ばれている陽子の職場では十パーセント以下で、しかも母親労働者は、ほんのひとにぎりすぎない。したがって、「総合商社」の受付に妊婦が坐るといふことは、そこに働く社員や役員の理

解できる範囲を超えた事態であった。この理解できない現実にぶつかって、人間本来のやさしさから接する人も少なからずいたし、相変らず企業の論理でしか考えられない人もいた。男も女もである。

玄関での出産

二度目の出産なので、陽子はすっかり落ち着いていた。初めてのときもそうだったが、はやくに母親を亡くしているので、準備はすべてひとりでした。その日の朝、徴侯があつたが、いつもどおり部屋を掃除し、洗たくものを片付け、風呂に入り髪を洗った。

二〇分間隔で陣痛がきはじめても、「アイタタ：ねえ赤ちゃんおりこうだから、もうすこし待っていてね、あとちよつとで終わるから」と独り言をいしながら台所の片付けをし、痛むとしゃがみこみ、去ればまた、ステンレスの油污れを落としていた。入院中に手伝いにきてくれる義母にだらしないと思われたくないから、換気扇の汚れまできれいに拭いた。最後に床を拭いてすべて完了、ちよつと、ひとやすみと横になると、急に激しい陣痛が間断なく襲ってきて動けなくなってしまった。ようやく電話のところまで這っていき夫に電話をかけた。

「パパ、急に生まれそうになつて動けないの。急いで帰ってきてちょうだい」

パパは電話をきいて、すぐ職場を飛び出した。愛車を飛ばせば、十五分で帰れる。家につくと、もう陽子は病院にはこべる状態ではないとみて、救急車を頼んだ。マンションの下におりて救急車を迎えにいっているパパは、なかなか戻ってこない。「おねがだから、もうすこし待っていて」とお腹の赤ちゃんに呼びかけるが、赤ちゃんはママの都合などまったく無視して、ぐいぐい力強く迫ってくる。赤ちゃんにしても、今朝早くから予告しているのという言い分もある。ついに陽子は自宅の玄関の上り口のところ、ひとり二人目の娘を出産した。

「あ、パパ、生まれちゃったの」と言おうとすると、玄関をあけたのはセールスウーマンであった。陽子も驚いたが、もっと驚いたのはセールスウーマンのほうであろう。いま生れたばかりの糸もまとっていかない臍の緒のついたままの赤ちゃんを抱いた女性が横たわっていたのだから。

「すみません、お隣の奥さまを呼んでください」と叫ぶと、セールスウーマンは飛び出して行って連れてきてくれた。驚いてしまっている奥さんに、お湯をわかすことや病院に電話して指示をあおぐことを寝たままお願いした。そのうち、出番をまちがえた役者みたいに、救急隊とパパがどやどやと入ってきて、母と娘を毛布にくるみ、ピーポーピーポーと病院へ運んだ。

つむじ風のような電話

翌日、陽子は職場の仲間たちに電話をかけた。「牧さん、お元気ですかあ、寺田ですう。二人目も女の子だったのよ、望みどおりで、とっても嬉しいの。今度はね、私ひとりで産んだのよ、うちの玄関で……。救急車も間にあわなくてね。私、救急車のなかで考えたのよ、これで出産費用が安くなっただって。だって、分娩費をはらう必要ないじゃない、ねえ、そう思わない？ 誰の手も借りずに、ひとりで産んだんですもの。ところが消毒や注射なんかで、普通よりも高くついちゃったのよ、おもしろいでしょ。とにかく、母娘ともに元気ですから、母の会の皆さんによろしくね。この話、出社したら、もっと詳しくしてあげるわね、じゃあ、また……。」

小さなつむじ風のような陽子の電話は、あつという間に、母の会の全員につたわっていった。



(一九八二年 「たたかいのルポルタージュ」四号)

— 子産みの歴史、その2 —

道を拓いた若い小さな力

前号の「子産みの歴史 その1」では、あたりまえの顔で明るく笑いながら、子どもを産み育て、働きつづけている女性を書いた。

この女性から話をきいていると、いくどとなく「わたくしが頑張れたのは、ミセスの会や母の会の先輩たちのお蔭です。」という言葉に出会った。今回、「子産みの歴史 その2」では、たいぶ時代をさかのぼり、この職場で初めて産前産後休暇をとり、育児時間をとろうとした砂川俊子さんに光を当てようと思う。あえて言うならば、私が入社二年目の年で、青春のページとして印象に残っている年にさかのぼって、砂川さんの「たたかい」と、それを支えた若い人たちの輪を、そこに居合わせたものとして書いてみたいと思う。

十五年という時を、さかのぼらなくてはならない。一九六七年。大手商社。今でこそ「百万円ボ—ナス」などと週刊誌を賑わしているが、当時は「商社斜陽論」があちこちで論議され、労働組合のスローガンは「商社低賃金の打破！」であった。青年が結婚し、公団住宅の入居申込みをしようとしたら、収入が最低基準以下だったために申込みが困っているという春闘の職場討議での発言を、今でも忘れられない。

その頃の労組婦人部の中心の課題は「働きつづけられる職場を！」であった。具体的には、「サービズ残業はしない」「机ふきは業者に委託せよ」「生理休暇の問診制度の廃止および有給化」「二八才で自立できる賃金保障」などであった。

生理休暇の問診制度というのは、生理休暇をとりたい人は診療室に申し出て、医師の問診を受け妥当と判断されるとはじめて登録され、休暇の申請が認められるという前時代的な制度であった。婦人部はこの問診制度の違法性を主張して会社と交渉をすすめながらも、女性たちに対しは、自分を鍛えて必要な人は積極的に問診を受け、いやな質問にも耐えて、休暇をとるという強さを求めている。職場単位で「生理休暇は何故必要」というスライドを上映し話しあい、取得率三パーセントという状態を徐々に改善しはじめていた。

会社は、それに対抗するように就業時間中に生休取得者とその上司を会議室に集めて、生理休暇不要論を説いた。ちょうどその頃、婦人公論に掲載された「生休無用論」がテキストに使われ、「部内で一人が生理休暇をとると、どんどん増えてしまう、禁煙車内で一人がタバコを喫い始めると、それまで我慢していた人たちがみんな火をつけ始める。それと同じことだ」という解説がされ、呼び出されていた女性は、課長同伴で生休の見当違いな「説明と解説」をきかされ、気恥しさと怒りで、力ツカツとしていた。反論する言葉を探していると、ある課長がくだけた大阪弁で発言した。

「うちのところは、ひどう忙しいんですわ。とりわけ入札前などは、若いもんでもきついやろと思っております。それで、生理の時はちゃんと休めていうてます。具合いわるうて働いていて、ミスがあったら、そのほうが大損ですからな・・・そんなわけで、忙しいてかなわんもんで、私は、このあたりで失礼させてもらいますわ」

重苦しい説明会の最後の部分が、すこしだけ柔らいで終った。

子どもを産んでも働いていたい

一九六六年婦人労働白書によると、全国の婦人労働者の平均年齢は二八・三才、既婚者は四七パーセントに達しているが、この職場では、平均年齢二二・三才、勤続年数は平均三年、既婚者数は四パーセント弱であると労働組合は発表している。

数すくない既婚女性として頑張っている砂川俊子さんが妊娠し、出産後も働き続けるつもりだという話が人伝てに聞こえてきた時、私は心のなかで快哉を叫んだ。この時、そう感じたのは、おそらく私ひとりではなかったはずだ。このニュースは職場に新しい時代を切り拓く画期的なこととして、口から口へ伝わり、若い女性たちを励ました。働きつづけたいと願っている若い女性たちにとって、自分の未来をより具体的に現実との繋りのうえで考えることを可能にした。

砂川俊子が出産後も働き続けようと思ったのは、経済的にとても苦しかったことと、姑との同居なので、子どもをみてもらえらるということからだった。労組婦人部長をやっていたことがあるので、あなたの決意は労働運動の延長線上にあったのではないかと尋ねたが、「そんなふうには意識づけを意識的にしたことはなかった」という。しかし、俊子が長女裕枝を出産した翌日に、頼みの姑は胃ガンの手術をし、当初の予定は大きく変更せざるを得なくなつた。

産休明けから一カ月間は実家から通勤した。子どもを育てながら働くということが、とても大変なこととは覚悟していたが、別居生活することまでは考えていなかった。しかし、会社では初めての産休取得者だということに注目を浴びているので、今まで以上の努力をしなくてはならないと心に決めていた。俊子は財務部のなかの出納課で支払係を担当していた。財務部は八割が女性で、産休明けの俊子を暖かく迎えた。都立第一商業高校を卒業して以来十年間、同じ課で働いてきた俊子自身の実

績の反映であることは明らかだが、見落せない一つの要因に婦人部の活動があった。婦人部はニュースを出して教宣していくのと並行して、財務部内の職場集会や出納課だけの話しあいを、俊子の産休中に幾度も開いて母性保護の必要性和初めて産休を取得することの意義、そしてそれを支えることの大切さを訴えていた。

「砂川さんは仕事が早いし、なんでも知っていて、別格の存在にみえたわ、大袈裟にいうと近寄りたいたい人ね、新人にとっては。その人を私たちが支えるんだということの意義ついて、そんなに深くわかったわけじゃなかったけど、休暇中もみんなでカバーし合ってたわね。まさか十年後に自分も産休をとることになるなんて、夢にも思わなかったけれど……」当時の新入社員の思いである。

実家から通勤した産休明け後のはじめの一カ月は、あとから思えばラクなものだった。その間は、労組婦人部から育児時間のあることを知らされていたが、申請をさし控えていた。育児時間という制度が労働基準法に規定されていることなど、職場の誰ひとりとして知らない状態である。みんなの協力で産休をとったばかりの俊子は、なかなか申請に踏みきれないでいた。

しかし、そういつまでも夫婦別居のまま、俊子が実家から通勤するわけにもいかない。裕枝ちゃんをみてくれることになってくる姑は胃癌の宣告を受けていた。まったくの手遅れで、お腹をあけただけで手を施すことなく閉じられたのだったが、それを知らない姑は、そろそろ裕枝の世話をみたくと言いはじめた。たとえ短い期間でも、そうしてもらおうのがよいと俊子は意を決し、姑を退院させ自宅から通勤することにした。

朝、姑と心臓の悪い妹の二人分の弁当をつくり、四カ月になる裕枝ちゃんの着替えとオシメを準備して七時四〇分に家を出る。

母乳がよく出たから、出勤前にはたっぷり飲ませたかった。そんなことで朝はどんなに早く起きても時間が足りない、追いつてられるような気分の日々が続いた。三十分でもいいから時間がほしかった。婦人部の言っている「育児時間」の必要性を実感し、現実の問題として申請をしたいと思いはじめていた。

「いま三人の子もちになつてふりかえってみると、あの頃は裕枝ひとりだったのに、どうして、あんなに疲れたのだろうと思うわね。生活のすべてに馴れないことの連続だったし、やはり初めての産休取得者という緊張も強かったかもしれないわね」

すてに三番目の娘も小学校に入り、何年ぶりでスキーを楽しむ余裕のできた俊子は十五年前をふり返つて、こう言った。

励ます会ニュース 第三号 (1967・12)

やっと出た年末手当 一砂川さん5万円のカットー

待ちこがれていた年末手当が出てホッと一息ついたものの、あらためて財布をのぞいてみると、その残りの少ないのに驚かされてしまいます。

励ます会は少しずつではありますが、順調に会員がふえ、八六名になりましたが、砂川さんが一時間の育児時間をとるためには、まだ充分とは言えません。私たちの五〇円が、砂川さんと裕枝ちゃんを、どんなに物心両面で支えているかを考える時、もっともっとたくさんの人で応援していきたいと思えます。

★ メモ

砂川さん(二九才)の年末手当は 七万九千円。

◇二九才女性の標準年末手当 十二万九千円。

来年一月からは、是非一時間の育児時間をとりたいとのこと。

会員になっていないまわりの人に呼びかけましょう。

砂川さんと裕枝ちゃんを 励ます会を結成

砂川俊子が育児時間の申請をすると会社の回答は朝夕三〇分ずつの

育児時間を許可するか、月給、一時金については時間計算でカットするというものであった。産休中も無給であった砂川さんに、励ましとお祝いの気持で始めたカンパ活動が、この会社回答に接して励ます会へと発展していった、一九六七年の俊子の月給は二万九千円である。そのなかから五、二五〇円のカットされることは痛手であった。しかも職務内容から夕方忙しいので、朝一時間まとめて取りたいという要望も認められなかった。俊子は労働組合と相談しなから、まず朝三〇分のみ取得することから始めた。

労働組合も婦人部を中心に団体

呼びかけ (1967・10)

仔ブタのアップリケの赤い服

ママさん労働者第1号の砂川さんを励ますカンパは1,041円も集まり、早速赤い地にブタのアップリケのついた冬の幼児服を差し上げました。

私達は、産前産後休暇を全面的に賃金カットされた砂川さんを励まし、また出産をお祝いするプレゼントを思いつき、カンパを始めました。ところが労働基準法で定められている育児時間に対しても、30分につき105円、1ヵ月につき2,625円も賃金カットされてしまいました。ミルク代その他出費のかさむ折にさらに多額のカットのため、労働基準法で決っている一日につき一時間の育児時間をとることか出来ない状態です。(一時間の場合、月5,250円のカット)

— 中 略 —

私達は育児時間に賃金が支払われるまで、定期カンパで砂川さんを支援したいと思い、ここに呼びかけます。

- 目的—産前産後休暇及び育児時間有給化を勝ちとること
- 資格—男女年令を問わず
- きまり—1ヵ月50円を納めること

交渉を重ねていたが、改善回答をひき出せずにはいた。一方で、若い女性のあいだから自然発生のよう
に出来上ってきた「励ます会」は集金の時やニュースを配る時にその趣旨が広まり、会員が着実に増
えていった。

「残業も、してもらわなけりや」

「砂川さん、今日も人事部長がお呼びだよ、早く行った方がいいよ。」あわただしい朝をくぐりぬ
けて出勤すると、課長は俊子の顔をみるなり言った。連日のことなので、言いにくそうにしている。

「そうですか。すみません。では、ちょっと行ってきます。」

俊子も気軽そうに受けて人事部に向かう。

その中身は行かなくてもよく分っている。昨日も一昨日も同じだからだ。

「旦那さんは、どう言っているのかね。あなたを辞めさせたいのじゃないの」

「子どもは母親の手で育てるのが、なによりなんだよ」

「決算の時は、残業も、してもらわなけりやならないよ……」

俊子は、月末の決算の数日が残業になることについては、最初から考えていて手をうってあった。
人事部長も顔見知りである。三年前の婦人部長時代、幾度となく団体交渉でテーブルをはさんで向き
合ってきた仲だ。

「姑も病気ですし、家のローンもありますし、やめるわけにはいかないのです。あの、仕事が忙し
いので、席にもどりたいのですが……」

俊子も毎朝同じセリフを笑いながら言い続けた。周囲の人の方がいろいろと心配をしたが、彼女は
それほど苦痛を感じているようでもなかった。そういうところが「芯の強い人」という印象を与える

のだが、実情は迷ったり悩んだり、ひるんだりすることのできない、ギリギリのところできている。夫は北炭汽船の企業縮小に伴って転職したばかりで、俊子の賃金より安かった。姑は胃癌で半年の命と宣告され、義妹は心臓がわるく、近いうちに手術を受けさせたいと考えていた。

三人の若い女性呼びかけた「励ます会」は、月末に集金をするたびに、またニュースを配るたびに会員が増えていって、三人では運営がむずかしくなった。各階に集金係を引受けてくれる人をさがし、手を借りることにした。

「いまは砂川さん一人だからいい。でもこれから五人、十人と増えた時、皆から五〇円ずつくらいのカンパでやっていけるのかって質問されちゃったんです。私、うまく答えられなかったの……どうしたら……いいのですか。」

一九才の集金係から涙声の電話がかかってくる。集金の途中で立往生してしまったのだ。「五〇円ずつ集める今のやり方は、その場の解決にしかならない。カンパして助け合うのでは、会社のやり方を認めているのではないか。」

労働組合の役員会のなかでもこのような批判の声があった。すべてが初めてのことばかりなのだから仕方がなかったとも言える。

労働組合としては、この「励ます会」の活動があること

男子会員のひとりとして

(略)

家庭と仕事の両立の難しさを身をもって体験されている勇気ある方々に敬意を表するとともに、先駆としての自覚をお願いします。

尚、みなさんにお願ひしいことは、この様な問題をはじめ各種組合活動に於いて一番重要なことは、各人がその人の立場(相手の立場)に立って考えることです。

一人でも多くの賛同者を得て一步一步前進するよう祈っております。

は認識しているが、積極的に支援はしないという見解を示していた。呼びかけ人の三人は、ときどき自信をなくしそうになりながらも、ちょっとした励ましで、たとえば、ある男性会員からの手紙一本でまた元気をとりもどすのだった。

一時間の育児時間がとれた

一九六八年二月は婦人問題が大きくクローズアップされた。労働組合東京支部の団体交渉のなかで、朝夕の二回の育児時間をまとめて朝一時間取得が確認された。(賃金カットあり)これが大きな記事になり東京支部報に掲載され、組合員のもとに配られた。これを追いかけるように本部組合新聞も婦人問題で特集を組み、全頁をさいて母性保護をとりあげ、全組合員に訴えた。労組史上はじめてのことである。無署名ではあるか、書記長のものと思われる文章のなかに「砂川さんと博美ちゃんを励ます会」について触れている箇所がある。「……いかに利潤追求の立場に立つ企業とはいえ、あまりにも露骨なやり方に過ぎはしないだろうか。最近、有志からなる彼女を励ます会が生まれ、カンパ活動も起っていると聞くが、彼女を物心両面で支援することより、会社のやり方に対する抗議、義憤の気持の現われと解釈できそうな気がしてならない。」

集金人たちは忙しかった。給料日とその翌日は、とくに忙しい。ゆっくり歩いているわけにはいかない。廊下は小走り、階段も駆け上った。階段を踏みはすして大きなアザをつくる人まで出てしまった。五〇円を集めて、月末までに砂川さんに渡したいからだった。

いったいその頃の五〇円の価値はどのくらいなのだろうか、現在の初任給(一八才)との比較でみる。

一九六六年

一六、五〇〇円

一九八一年 九七、五〇〇円（約六倍）

今でいえは三百円くらいに当たるだろうか。一〇〇人で三万円のカンパを毎月しようとしたということになる。

ついに100人！

「励ます会」ができて六カ月目の一九六八年三月、会員が一〇〇名の線を超えた。砂川俊子が受けている賃金カット月額が、五二〇〇円だったから、当面の目標は一〇四名である。その目標達成は、もう時間の問題であった。給料日の集金もおおっぴらにできる雰囲気になってきて、涙ぐむ集金係もいなくなつた。

労働組合も本腰を入れ始めていた。春闘の諸要求のなかの一つとして、本部では母性保護協定の全面改定を要求し、署名運動を初めて取組もうとしていた。東京支部としては、砂川俊子の個別問題を解決しようと、支部団交を重ねていた。

会社回答は「育児時間は一日朝夕三〇分ずつ取得できる。但し、一時間にまとめることもできる。月例賃金には影響させないが、一時金は出勤率計算の対象とする」であった。この回答により労働組合は署名運動に入ることを中止し、一部に不満な点はあるが、大きな前進であると判断して協定に合意した。

「励ます会」のメンバーは労働組合の執行部の決定に不満を感じていた。一時金で出勤率を適用するということは、一五パーセントの減額を意味していたからである。この気運のなかでなら、もうひと押しすれば完全有給がかちとれるように思えた。

「励ます会」の解散そして播いた種

春闘も終り、五月のゴールデンウィークも終わった一三日と二一日、今後の方針について話しあいもたれた。完全有給の獲得まで会を続けようとする声も出たが、大勢はここで一応のしめくくりをして、来年の春闘でもうひとつがんばりしようという意見にかたまった。俊子から最後の月のカンパ五千円が会へ寄附されていたので、その使途についても話しあわれた。その結果、解散記念のパンフレットを作って、たくさんの人に配ろうということになった。

「砂川さんと裕枝ちゃんを励ます会解散記念」と銘打ったパンフレットに、当時の婦人部長が長文を寄せている。その一部を紹介しよう。

《カンパという素朴な人間性に訴える行動が、果してどれほどの反応を期待できるだろうか。甘いよるい感傷的な行為として反撥をかうか、心の中では同調しながらも照れ臭くて行動に現わしてくれない人も多いのではないだろうかと正直なところ少しばかり懐疑的でした。ところが予想は幸いにもはずれて、女子社員の十人に一人は会員になるという結果を見たのでした。

カンパという行動にこめられた私達の連帯と団結が、署名や三角錐闘争以上の効果を発揮し、育児時間という難しい問題の解決に、大きな力となったことは疑いありません。そればかりか不毛の砂漠と思われた土地に緑を発見したような気持ちさえるのです。

「励ます会」はこの画期的な時期の金字塔として私達の心の中に永遠に残ることでしよう。《女性要求の高まりを背にうけ、なかなか婦人問題を理解できない男性執行部のなかに、ひとりが入っていた婦人部長の文章の行間に苦勞をしたあとの熱い喜びを感じる。

この小さなパンフレットの小さな後記の欄は、そつと続いている若い波を感じさせる言葉でしめく

くられている。

《大きな企業のなかで、初めて母親労働者が生まれる。その母親を励ます心を寄せあつてできた。十月月たらずで解散することになった。短い命であつたが、この会の播いた種は、二番目の、三番目の母親労働者となつて芽生えた。今、四番目の方が産休中である。》

解散記念のパンフレットの完成と同じ頃、俊子の夫から「励ます会」の世話人たちに自筆の色紙が届いた。鶯や椿や牡丹が一枚一枚ていねいに描かれていた。裕枝ちゃんの保育園の送り迎えの半分以上を手伝う絵の好きな夫からの贈り物であつた。

現代ルポルタージュ研究会の新しい試みとして、「会員全員が、特定の日と同じものを同時に、しかも個別に取材してルポルタージュを翌日に仕上げる」実験をした。それが一九八二年五月二十三日の核兵器廃絶のための大集会であつた。私はこの大集会に次女ナオを連れて参加してルポを書いた。それがこの作品だ。私は三九歳、ナオ九歳。なぜミオが一緒でないのだろう？ 思い出せない。翌日の夜に作品を届けるため私は休暇をとつて書き上げた。仲間の浅利さんに電話したら、彼も休暇をとつていた。

(一九八三年 「たたかいのルポルタージュ」五号)

五・二三の大きな流れのなかで

—— 娘と「ベンセレモス」 ——

快晴。小学校四年の娘は、ちひろの絵とPEACEの文字の入ったTシャツ、私は背中にベンセレ

モスと書いたTシャツを着て出発。ふだん留守番ばかりさせているぶんを取り戻そうと、手をつなぐと、照れくさそうに手をひっこめる。

通勤ラッシュの時に山の手線は満員で、並行して走っている西武新宿線も、おそろいの緑の帽子で全車両が埋められている。この緑の帽子の波は、そのまま代々木公園へ続いていた。

人の波をすりぬけながら待ち合わせ場所に直行して、職場の仲間と合流。こういう集会に初めて参加した若い女性の顔、ずっと昔の日韓条約反対のデモ以来、顔をみせてくれなかったなつかしい顔にも会う。場違いな涙が出そうで、言葉が出てこない。ただ笑って首をふった。

開会までまだ二時間もある。メイン広場の舞台の見やすいところに陣取った。『核兵器廃絶と軍縮をすすめる／八三年平和のための五・二三東京行動』舞台の後の大きな文字を、ゆっくり読みあげると娘も真面目な顔でうなずいた。

ダイ・イン。午後一時。死者にかわって抗議する一分間、代々木公園の草原に横たわる老若男女そして子ども達の上をヘリコプターが旋回する。五機か七機か、エンジンの音が爆音のように聞えて眼をひらいてしまった。どこまでも青い空。語り継がれている一九四五年八月一五日の空も、このようだったのだろうか。

三七年前、人類滅亡の瞬間を私は見たという長崎市長のアピールに会場は静まりかえった。

「長崎を最後の被爆地にしなければならぬ。世界中のどこにも、三発目の原爆を落とさせてはならない。」という核廃絶の強い訴えに二〇万人の参加者は海鳴りのような拍手をおくった。

CIAの策謀で倒されたチリのアジェンデ大統領の芸術使節団「キラ・パジュン」の登場。いつもながらの黒い服と黒いマントで、指を切断されて死んでいった愛国のギターリスト、ビクトル・ハラの曲を歌った。その時、公園の隣の大きな建物の煙突から黒い煙が、モクモクと出はじめ、横に流れ、ゴムの燃えるような臭気まで漂ってきた。原爆を落とされた広島や長崎で何日も続いたという死

体を焼く煙を思い、アウシユビッツのガス室の隣の煙突をおもい、じりじりと灼かれるような太陽の下なのに鳥肌たった。

「ベンセレモス」の大合唱が始まった。この曲は娘も歌える。恥しそうに口を動かしている。もっと大きな声で、と耳うちすると、困ったような顔をする娘。海外公演中にクーデターが起こり、帰国できなくなったキラ・パジュンが早く祖国へ帰れるように、できるかぎりの声を出してほしいという私の思いは、娘に伝わっていないのだろうか。だんだん歌声が大きくなり、みんながベンセレモスを心底うたった。となりの娘も大きな口をあけて歌っている。

ベンセレモス　ベンセレモス　鎖を断ち切ろう。

ベンセレモス　ベンセレモス

苦しみを　乗り越えよう

拍手が鳴りやまない。立ち上がって手をふる人、頭のうえで拍手する人。

「勉強しましょう。僕もしています、そして行動しましょう。」

ちょうど一週間前にマーシャル群島の米軍基地の傍に立って、核ミサイルを調べ考えていた小田実氏の口早やのアピール。各界の代表のメッセージが続く。

私の隣には幼児三人をつれた若夫婦がいる。いちばん下の子は二歳になったばかりであろうか。昼寝の時間になったのだろう。暑くてグズツている。若い父親が辛抱強く抱いてあやして、木陰へ逃れ寝かしつけて、そっと戻ってくる。まわりの誰もがほほえましく眺め、寝る場所をつくってあげた。ニューヨークでも、ベルリンでも同じ光景があったのだろうか。

緊張をほぐすように舟木一夫、大津美子、尾藤イサオの登場がつづく。いづみたく氏も自作の歌を

歌った。

「私には十一歳の息子がいます。息子を絶対に人殺しにしたいくはない。もちろん殺されるのもいやです。ですから一生懸命やっているのです。」——「ここに幸あり」を歌った大津美子の言葉に共感の輪がひろがり、尾藤イサオの「仕事の歌」の手拍子で会場全体が高まった。

岩手のゼツケンも大阪の旗も京都のノボリも波のように動き始めた。五・二三があらたな出発点となって代々木公園から流れでている。ここ代々木に集まった二〇万人余。上野の山にも十六万人。若者同志手をくんで、親たちは子どもの手をひいて、杖をついたお年寄りを青年がいたわって、みんな歩き始めた。



会社から産休を勝ち取って長女を出産



沖電気争議団とともに10年闘った



マリ(母)、裕子、未生(長女)、菜生(次女)

共働きが珍しかった時代、ましてや働きながら子育てをすることなど想像もできないという職場環境のなかで、七〇年代にはいると少しずつではあるけれども、母親労働者が増えていった。しかし、どれほど時代は進んでも悩みは尽きなかった。お互いに支え合い、励まし合って、働き続けることのできた母親労働者ばかりを書くわけにはいかない現実があり、六号では働き続けることを断念した母親を取り上げた。この作品は、私もみずから何度もかえりみながら書いたが、職場での受け止めは、私の予想をはるかに超えて大きな波風を立てた。

(一九八四年 「たたかいのルポルタージュ」 六号)

— 子産みの歴史、その三 —

「働きつづけたい……」

三人目を授かって

「母の会」

一九八三年十月二八日(金) 昼休み。阪神物産で子どもを育てながら働いている女性たちの集まりが開かれた。この集まりは「母の会・赤ちゃん組」と名付けられている。母親労働者の数がわずかだった頃は、「母の会」として一つの集まりで間に合っていたが、近頃のように、いつでもママニティの女性が目につく状態になってからは、「赤ちゃん組」「幼児組」「学童組」と分かれて集まっている。

部屋では世話人が二〇個のホカホカ弁当を用意していて、人口で四百円と引換に手渡ししている。それぞれお茶をセルフサービスして顔見知りを見つけては席につく。

「久しぶりね、ちよっとスマートになったみたい。羨ましいわ」

「あら、いつ産休が明けたの、あなたが母親とは思えないわね。学生さんの雰囲気のままじゃないの」

会話があちらこちらで始まり、お弁当も勝手に食べ始めている。所属部が同じ者同士か、あるいは同期入社の仲間ぐらいいしか親しく言葉を交わすことのない大企業のなかでは、きわめて珍しい組み合わせで、和気あいあいの風景がくりひろげられていく。

「今日のテーマは。『二人目をどうするか』にしました。世話人で相談したのですが、最近のみんなの関心は、どうもこの辺らしいということになったのです。それと、組合婦人部から、母乳について当事者はどう考えるかという問合せか来ていますので、それもあわせて話し合えればいいのですけど……」

頃合いを見計らって世話人が進行を始めた。一瞬しんとしたかたい空気にかわり、皆下を向いて食べることに集中している。

「あのう、私、このあいだの課長の面接のとき、二人目のこと聞かれたんで、大決算に産休がぶつからないように、来年の十一月頃に生みますって言っちゃったんです。もうすぐ三才になるし、二人目どうしても欲しいから。でも、ほんとにそんなにうまくいくか自信ないのよね」いつも人を笑わせることのない大野が、深刻ぶって言うもので、みんな笑いを噛み殺している。誰かが「まあ、すごい、出産予告宣言しちゃったの」と言うと、我慢できず笑い声かはじけ出て、かたい空気が瞬間的に解けやわらぐ。

「あのね、最近のように女性がどんどん減らされていると、産休はととても取りにくいけれど、この決算期をはずしてとか、あの仕事を片付けてとか条件を作ってから産休をとろうとすると、永久に子ども産めないんじゃないかしら。一生働くつもりだったら、その長い間に二人の子どもを産む時期ぐらい、自分で決めていいと思うのよね、条件はそれに合わせてつくり出していけばいい、と思うんだけど……」

最近二人目の産休か明けて出社したばかりの竹内が楽天的に言う。この人は昇格を二年も遅らされているのに、いつも明るく前向きなので、みんな首をふり同感の思いを体まることで表現し聞いている。

「でも、やっぱり気兼ねしちゃうわね」

「どこかの経理で同じチームの若い女性から面と向って、もっと計画的に妊娠してくださいって言われた人がいるんですって」

「え、それどこ。まえは女性同士でそんなこと言うこと考えられなかったけど」

「忙しすぎて、みな心がささくれだっているのよ。思いやるゆとりなんて持てないのは無理ないと思うことあるわ」

大野の話で口火が切られて、隣り同士あるいは斜め前の人と自分の周囲の様子などを、笑ったり奮慨したりしながら話が弾んでいく。司会の世話人も、すっかりオシャペリの輪に入ってしまったって、ひとりオブザーバーの私が昼休みという短い時間に気を揉んでいる。

「ところで、財務部の緑川さんのところはどですか」

司会がオシャペリの輪からうまく抜け出て、すこし高い声で問いかけると、部屋はしずまる。やわ

らかな静けさである。

「ええと、うちの部は、あのう、なんと言うか伝統みたいなものがあって：今、産休とる人も、ま
えに誰かをカバーしたことあるし、今、残業しながら、その人の仕事をカバーしている若い人も、い
つか産休とることになるだろうしって：。さっき、誰かが言っていたみたいな嫌味を、同じ女性が
言うなんて信じられません。私も二人目は欲しいと思っっているし、働き続けられるんじゃないかなと
思っています」

若い緑川が考えをまとめようと、ゆっくり話すのを聞いている母親たちの顔か、だんだん真剣にな
っていく。同じ企業でありながら、別世界のように感じている人もいるようだ。この財務部は、女性
が八割を占めていて、仕事の中心的な役割を女性が担っているうえに、二三年前に、会社ではじめて
産休をとった砂川を全員で支えた経験をもっている。「(子産みの歴史)その二を参照いただきたい」

「うらやましいわ、そんな雰囲気、私のところ全然ないもの。でも、それ、建前なんじゃない、本
音はもっとシビアじゃないかしら」

「建前でもいいのよ、いまや建前が通らなくなっているんだから」
「陰で多少ぐちをこぼすのは仕方ないと思うのよ。みんな忙しい時、私たちだけ育児時間もらって
いるんですもの」

「でもね、ムカシの組合で言っていた母性保護の意義みたいなこと、次の世代をになう子どもを産
み育てることは社会的、人類的な意味があるというようなことを誰も口にしなくなることは恐ろしい
ことよ。本音のところ、若い人たちにも支えてほしいわ」

「それは甘いわよ、以前と状況が変っているもの。妊娠しておめでたいとか、祝うとかの気持を持
てないところまで追い込まれるのよ」

緑川の話から、またオシャベリの輪か二重にも三重にも広かかっていくなかで、中山静子ひとりが笑顔のまま発言しないでいる。静子のお腹には目立っていないけれど、三人目の子どもがいる。五カ月目にはいつている。働き続けるかどうか悩んで、私に相談をもちかけてきたのが、十日ほど前のことであった。彼女はどんな思いで、皆の話をきいているのだろうか。

子どもができた

始業の三〇分まえになると、部課長が席につき始め、ポットを二本かかえてキッチンに小走りに向う女性や、机の上を拭いている当番の女性の姿がある。各コーナーにあるトレックスの端末機からは地球の裏側からトレックスが一晩じゅう入りつづけて、段ボール箱から溢れ、床の上でとぐるを巻いている。これを一件毎に切り離し、担当者に廻すのは、かなりの手間仕事なのだけれど、いつの間にか、始業前に完了させることが当り前となってしまった。始業のチャイムが鳴る時には全員着席し、コーヒーが配られ、トレックスも担当者の机の上に置かれている。これが女子社員の時間外奉仕でずべて行われてしまう。

ひと仕事片付けて、コーヒーを飲み始めると、電話がいつせいに鳴り始める。問い合わせや催促や苦情の電話に混って中山静子からの電話があった。珍しいことだった。わりあい明るい声で遠慮がちに、お昼休みの時間に会いたいという。上司に嫌みでも言われたのかもしれないと思いつつ、久しぶりだから、すこし豪華版でいこうと約束した。

静子はすこし遅れて、転がるようにエレベーターから出てきた。ずうっと向うから「すみません」と言っているのがわかる。「ほんとに久しぶりね、すこし、ふとったみたい、元氣そうじゃない」な

どと、同じ職場で働いているとは思えない言葉で挨拶する。考えてみれば、一カ月ちかくも顔を合わせていなかった。電話で約束でもしなければ、一年でも二年でも顔を合わせないで過ぎてしまう。

すこし気取った雰囲気のレストランに入ってしまったせいか、静子はなかなか本題に入ろうとしない。下を向いたまま話し始めた。

「私、あかちゃんが出来たんです。もう五カ月にはいったところ。おろすことも真剣に考えたのですが、できなかつた……」

こらえきれない涙が一滴落ちる。

「次男との間が一年一カ月しかなくて、おにいちちゃんだって来年五月でやっと三才になるんです。もう無理だつていう気がするの。でも、会社をやめるしかないと思うと、やめたくないつていう気持ちが、どんどん湧いてきて、なんとかがんばれば続けられそうな気がするし、考えると眠れなくなつちゃうのね」

「ツワリもなかつたし、小さな子二人いるでしょ、毎日きりきり舞いしていて、妊娠なんて、ちつとも気づかなかつたの、へんだと思つてお医者に行つた時には、もう五カ月に入る寸前で……」

私は自分の口から出すべき言葉が見つけれず、ただ彼女の言うのを聞いていた。なにを食べているのかも感じないで、機械的にナイフとフォークを動かしている。なんとということだ。静子の職場は環境の厳しさでは定評のあるところではないか。「独身の人と同じことを同じようにやっていたはダメだ。子もちは、独身より子どもがいるだけでハンディキャップがあるのだから」という理由で静子の昇格を二年もストップさせている課長。子持ちの人とはチームを組みたくないと言言する若い女性、静子をかばう人に対して、結局は自分の株を上げるためにやっているにすぎないと噂しあう人のことなど、私には、暗い話ばかりが聞えてくる職場なのだ。

私にいい知恵などあるうはずがない。いったい亭主は何を考えているのか。妻が涙をこぼすほど悩

んでいるのを知っているのか。静子自身は夫にどう話しているのだろうか。

「あのね、彼はどう考えているの。十年以上もがんばって働いてきたもの、どうしたら続けられるかって整理して考えてみない」

「彼はね、私の好きなようにしていいっていうの」

「好きなようにといったって、子どもが二人と三人じゃ忙しさが違ってくるのよ。まして年子だしね。保育園も同じところへ預けられるかどうか分からないし」

こんなことは私が言うまでもなく、静子自身がよく承知していることなのに、追いうちをかけるように言ってしまった。二十才の頃から知っている静子に働き続けてほしいという気持と、無理ではないかという気持が混り合って、見通しがたたない。もう昼休みも終わりそうだ。静子の職場はベルなる五分前に席に戻っていないと課長がうるさい。

「通勤電車のなかが一時間半もあるのでしょ。働き続けるうえでの問題点を書き出してみてね。たとえば赤ちゃんが保育園にすぐ入れるかどうか、送り迎えをどうするか。保育料は三人で十万円以上かかると思うの、お迎えを誰かに頼めばプラスアルファよね。それから、あなたの職場のこととか：いろいろなあると思うの、ひとつずつ洗い出して、彼と二人で解決できるかどうか考えてみて、家をもっと会社の近くに引越すことはできないかとかね。私で手伝えることがあればするし、また一緒に考えてみましょう。」

これで時間切れである。静子が疲れ切って、助けを求めている心を励まし、蘇らせるような言葉をなぜかけなかったのか。私は事務的な調子で終わってしまった最後の言葉を悔やみながらも、いらだたしさを押えることができなかった。

十年まえの私たちは、二人目を産むにもそれは気を遣っていたものだった。人知れずトイレで乳を

しほり、保育園の送り迎えも人に頼んで残業をした。それでも四年ぶりに妊娠した時に「またですか？」と言われ、歯をくいしばって笑いをつくりながら、「迷惑をおかけします。休んでいる間のことをよろしく」と言ったことを忘れられない。幾人もの、そのようなことの積み重ねがあつて、ようやく二人あるいは三人の子どもをもてる状況にたどりついたのだつた。

とはいえ、今だつて良い条件が整つたというわけではない。逆にここ数年の人員削減によつて、厳しくなつたとさえ言える環境のなかで、働き続けることは並大抵なことではできないのだ。この科学の時代に、もう少し計画出産ができないのか、静子は、夫は、なにを考えているのかと、思わずにはいられない。

一日は二四時間

静子の朝は五時半の起床で始まる。まず、次男耕介にミルクを飲ませながら、洗たく機を回す。静子が洗たく物を干しているあいだに、夫が朝ごはんの用意をする。ふだんのメニューはパンと牛乳、野菜炒めと卵、それにヨーグルトか果物というから、なかなか立派なものである。七時すこしまえに長男の俊介を起こす、二才五カ月になる。ひとりで手洗に行き、パンツなど自分でできるものはひとりで着替え、大きなものは静子が手を添えてやる。夫と俊介が朝食をとつている間、静子は耕介の様子を横眼でみながら化粧をするので、朝食はどうしてもつまみ食い程度で済ますことが多い。夫と俊介がエンジンをかけて待つている車に、耕介を抱いて乗り込み、光の子保育園に向うのは、遅くとも七時五〇分でないならぬ。保育園に俊介と耕介をあずけ、そのまま夫の車で駅まで送つてもらい、八時二〇分発の電車に飛び乗る。

八時二〇分発の電車に乗り込み、座席に腰をおろすと、静子の一日のパートIが終り、パートIIの

始まりである。静子専有の時間がくる。池袋までの五〇分は楽しみな時間だ。だから長距離通勤といわれるけれど、大変だとか嫌だとか思ったことは一度もないと言う。新聞を読み、読みかけの本の続きを読む。ほんの二〇分ほど前に通り抜けてきた忙しさをすっかり忘れてしまう。

しかし、この二週間は本を開いても一行も進まない。三人目の妊娠がわかってからは、気がつく、と、働き続けられるだろうか、やめるべきなのか、みんなはなんて言うだろうか、と考え込んでいく。

九時一〇分、池袋に到着。二本の地下鉄を乗り継いで、会社へたどり着くと九時五〇分になる。今は朝三〇分夕方一時間の育児時間をとっているが、耕介が満一才になると、育児時間は終わり、一日の始まりを全体に三〇分繰り上げなくてはならない。

朝の育児時間はともかく、夕方の育児時間をとるのは辛い。みんなが無駄口をひとつもきくこともなく、カードや伝票と格闘している時「お先に、ごめんなさい」と小さな声で言っただけで立ち上る。ときどき課長から、立ち上った瞬間に帳簿点検するから、持ってくるように命じられることがある。なぜか課長は静子の帳簿点検を五時頃するのである。こんなことがなければ、夕方は朝と逆のコースを五時より開始して、西武新宿線狭山市駅に六時五〇分に到着する。

駅前にある手打ちうどんの店は両親の店だ。夫もそこで働いている。手のすぐ四時頃に、二人の息子を保育園に迎えに行くのは夫の日課である。静子が帰ってくるまでは、母屋で姑が二人をみていて、ミルクと夕食も済ませておいてくれる。店がたてこんでくれば、姑も手伝いに出なければならぬから、静子は駅からの僅かな距離も走ってしまう。お腹の赤ちゃんのことも忘れて。

息子たちを連れて夫より一足先にアパートに帰り、入浴させ絵本を読んでやり寝かしつけると、もう九時を回っている。山のような洗たく物をたたみ、明日の保育園の準備をし、連絡ノートに眼を通

す。連絡ノートを読む時はとても心が和む。光の子保育園の家庭的な雰囲気を選んでくれるからだろうと静子は思う。疲れて帰ってくる彼のために、ちょっとしたツマミをつくり、二人で晩酌して、ほっとひと息つくのが十時半。しかし、そうゆっくり喋り込むわけにはいかない。また明日の朝は五時半から始まるのだから。

なぜ昇格できないか

電話の主は課長だった。時計をみると十一時二〇分をさしている。手が空いたら、六〇七会議室に来るようにと事務的な口調で言っただけだ。妊娠に気がついたのだろうか。子どもが三人になっても、働き続けることができるのかどうか、自分自身で解答を見出せていない今、何を話すにしても、課長と話したくなかった。会議室へ呼び出されるなどということは、滅多にあることではないし、石のような気持をかかえ込んで、静子は立ち上がった。

「仕事は一応そつなくこなしていて、特にマイナス点のつく要素はないと、私は思っている。しかし、それじゃなぜ昇格しないかということだが、育児時間を取っていることが影響していると思うね。はつきり言っただけ、会社の考えとしては、君は居てほしくない存在だということじゃないかな」

婦人委員をしていた頃の知識を利用して、おとなしい静子にとっては精一杯の反論を試みた。「産休や育児時間をとっていることを理由に考課をつけてはいけないことに、会社と組合の間で取りきめられていますけど……」

「それはともかくとして、私の考えが会社と同じというわけではないよ。しかしねえ。総合的に判

断すると、やはり君は商社には向いていないと思うね、君のいいところが少しも発揮できていないよ。働くにしても、別のところに移った方が君のためにいいと思うね。これから先の長い人生を大切にするんだね」

「月は自分から光を出さないが、太陽によって輝くときがある。月は太陽との重なり方によっては、新月になったり、日触を起したりするわけだよ、君は月のような立場にいるわけで、ここには力を発揮できないだろうね」

静子には課長のまわりくどい解説が、よく呑み込めなかった。要するに辞めろということなのだと思っただが、返す言葉も、それを押し出す力もなかった。

「来年の新入社員の要求人数を今月いっぱい人事部に報告しなくてはならないんだ。急に辞められても、期の途中だと補充もきかないんで、君の都合はどうかと思つてね」

お腹の子のことを考えると、絶対働き続けますとは言いい切れなくて、考えてから返事させてほしいと言つて席を立ち上つた。もう昼休みのチャイムかな

生理休暇・ツワリ休暇・通院休暇・産前産後休暇
並びに育児時間に関する協定 (抜萃)

I 生理休暇 (略)

Ⅲ ツワリ休暇 (略)

Ⅳ 妊娠中の通院休暇 (略)

V 産前産後休暇 (略)

VI 育児時間 (略)

1. 取得基準

生後満一年に達しない生児を育てる女子従業員が請求した場合には一日二回各々四五分間の育児時間を与える。ただし本人の請求にもとづき会社が業務上支障ないと判断した場合に限り一日二回を三〇分と六〇分に分けてまたは一日一回(二時間三〇分)にまとめてこれを与える。

2. 給料及び昇給

育児時間の取得により給料および昇給に影響させない。

3. 賞与

取得した育児時間は出勤として取り扱い賞与に影響させない。

4. 考課

育児時間は昇給および賞与の効果の対象としない。

VI 妊娠中の女子従業員の就業時間 (略)

VII 妊娠中および産後の業務の軽減 (略)

VIII 協定の有効期間 (略)

阪神物産株式会社

常務取締役 ○○○○ (略)

って十分も過ぎている。

働く母、妻とその夫

私は十一月の土曜日の午後、静子の家を尋ねた。昼休みに幾度話しても、いつも話し尽せない焦りと、静子の説明ではよく分らない夫の態度を直接この眼で確かめたかった。

駅前の古いうどん屋は二時を過ぎてても客がたてこんでいるようなので、母屋に廻った。静子は職場では無理矢理制服を着ているので分らないが、くつろいだジャンパースカートをはいっていると、身のこなしのすべてが、妊婦のものである。ゆったりと出迎えてくれた。近くのアパートが若夫婦の住居なのだが、ほとんどの時間を父母の営むこの古いうどん屋で過すのだという。

「お姑さん、会社でいつもお世話になっている牧さんです。なんでも相談しちゃうんですよ」甘えたような口調は母親になっても、ちっとも変わらない。

「あのね、うちのお姑さんは若くて元気で、なんでも私より上手だから、なにからなにもで助けてもらっているの」と私に姑を紹介する。ああ静子らしい嫁姑の対し方なのだ、やさしいなと感心する。

「あのう、うちの彼です」

屋の客の流れが途切れ、ようやく午後の休憩に入った夫を静子は少しテレ臭そうに紹介してくれた。料理人らしい白い服を着たままの「うちの彼」は、おだやかな眼の光をした青年の顔をしている。

「保育園へお迎えに行くのは、いつもあなたなんてすって、なかなか大変でしょ」

「三時から五時まで店を閉めますから、その間に行くんです」

「洗たくものも取り込むですって」

「朝、静子が洗たくできた時にはね。この頃は、洗たくしない方が多いから、僕が洗たくして干しますね。小さな子どもが二人ですから、散らかすし、掃除もしますよ」

「いやあだあ、そんなに全部バラさないですよ」

静子が彼の脇をこぎながら全面肯定している。静子が、台所に立った時を狙って、質問してみる。

「静子さん、会社のこと辛そうですか」

「いやあ、あんまり言いませんね」

「三人目の赤ちゃん生まれたら、ちよつと大変になるわね」

「ええ、続けるのは無理じゃないかなって気はしているのですけど……。あいつ仕事が好きみたいだからね。実は、僕も結婚する前、銀座のレストランにコックの見習で勤めていたんですよ。下働きが終わって、ようやく本格的なコックの修業に入れるって時に、兄貴がこの家を出てしまつて、僕に跡を継げと言われて戻されてしまったのです。本当は、もっとコックの修業を続けたかったですよね。だから、あいつにね、自分の好きなようにしろって言ってるんです。僕のできるだけは手伝うし、仕事を続けるかどうかは、自分で決めなきやダメだと思ふんですよ、自分の経験から辞めるにしても同じことですよ、自分の考えで決めなきや」

光の子保育園のお迎えに行く車に同乗させてもらった。車で十分、駅より奥へ入っていく。歩ける距離ではない。畑や雑木林を過ぎて、小さな十字架のある教会の小さな保育園が光の子保育園だった。

車から二人が降りて園庭に入ると、遊んでいた幼児たちが「俊ちゃんのお父さん」「耕ちゃんのおじちゃん」といつて取り囲む。彼は子どもたちの人氣的である。しゃがみ込んで、幼児と同じ眼の

位置で話している彼の姿をみているうちに、私は申しわけないような気持になった。彼に会うまでは、勝手に無計画に三人目の子どもをつくって、働き続けたいという妻の気持を少しも尊重しない我儘な男のイメージを抱いていたのだから。私の頭のなかは、いつのまにか機械的で図式的にしかものことを考えられないようになっていたようだ。

彼がひとりで迎えに来るときは、助手席に取りつけたトットトッターに次男の耕介を坐らせ、ベルトで押えてひっくり返らないようにし、二才五カ月の俊介は後の座席にひとりで座っているという。俊介を後にひとりで座らせるのは危険だなと思うが、毎日そのような状況にあることを知っていれば、簡単にはそのことを口に出せない。そのうえ来春三人目の赤ちゃんが生まれた時のことを考えると、私はやっぱり無理かもしれないと思ってしまふ。いったい彼はどうやって乳幼児を三人いっぺんに送り迎えするのだろうか。

静子の職場で

社員食堂で静子の隣の職場にいる時枝から声をかけられた。時枝は日焼けした顔に大きな眼がクルクル動き、思っていることを何でも出してしまふ外向的な現代娘である。爪には口紅と同色の深い紅いマニキュアをしている。声はよく透り、早口である。

「静子さん、辞めるって話、ほんとうですか、まわりの人が三人目生まれたら無理だって言っているみたい」

静子は妊娠したことを誰にも言っていないはずなのに、どうして隣の職場にまで話がいつているのだろう。まして会社を辞めるかどうか静子自身が決めかねている状況にあるのに、本人の気持には関係なく、退職にむけての雰囲気周囲から固まりつつあるようだ。

時枝は興奮気味に早口で、いちだんと声を大きくして続ける。

「赤ちゃんができること」「おめでた」って言うじゃない。私、どうして「おめでとう」って、みんな言っておげられないのか分らない。年子だっていいじゃないの。さずかったということですよ。たいへんでも頑張っておめだすのが女同士じゃないかしら。それを無計画だとか、迷惑をかけるとかって。課長が言うなら仕方ないと思うのよ、それが仕事なんだもの。それを女性が言うなんて情けないと思いませんか」時枝の口調はますます強くなる。

私は思わず、聞かれてはまずい人がいないかと周囲を見まわしてしまう。そして時枝の素直な憤慨に心をうたれながらも、静子のチームは、みんな残業ばかり続いていて、お茶やお花の稽古にも通えないようなところだから、心にゆとりがもてないのよねと声を低めて言った。

「商社冬の時代」や「贅肉落とし」が叫ばれ、事務の機械化と効率化、社員の活性化と能力開発をスローガンとして、雪崩のように人減らしが進められている現状をみると、暖かく「おめでとう」と言えない女性たちもまた、静子と同じく合理化による被害を受けているのだというような、一般論を時枝に対して述べている自分に腹が立ってきた。

私自身が静子に寄り添って考えているつもりでも、心から「おめでとう、今度は女の子だといいわね」と言えなかったではないか。三人の子どもを産み育てることは、本来自然なこと、すばらしいことだということとどこかに置き忘れてきてしまったのではないか。

「やっぱり、無理なのかしらねえ。なんだか淋しくなっちゃうわ。本人は続けたいのに」

時枝は暗い表情をして呟いた。



「人減らし」ということ

ここに静子の所属する経理第四部を含む経理本部の人員削減計画がある。一九八二年四月から翌年三月までの一年間の計画だが、ほぼ完全に行なわれた。経理部・総務部・財務部などの非営業部門は、退職者が出ても補充しないのは当り前のことで、チャンスがあれば営業部門に配置転換するなどして、人員削減目標を達成するために、管理職者はあらゆる「努力」をすることが義務づけられている。その結果、経理本部として二八パーセントの人員削減を行ったわけだが、静子の職場（第四部）は三四パーセント減で、年間削減率ナンバーワンとなっている。

九人のチームが一年間で六人となったわけで、九人体制の時でも月末から翌月初めにかけての決算時期は残業になっていたのであるから、三人減ったとなると、一年中、時間と仕事に追いかけるような忙しさとなった。電話が鳴っても誰も出ない。特に内線のベルだと著しい。電話を取り継ぐ時間もつたいないのだと言う。いつまでも鳴り止まないベルに仕方なく誰かが受話器をとる。当然ぶっきらぼうな応対とならざるを得ない。

静子は夕方の育児時間を取っているから、皆の忙しい最中に席を立つのが、とても辛くて心苦しいと言う。そう思っているからこそ、明るく大きな声で「お先に！」と言いそびれて、低い声でぼそっと挨拶することになってしまう。そうすると聞こえないのか、無視しているのか、誰も顔もあげずに仕事を続けている。ただひとり静子を励まし支えつづけている秋野がいる時は「おつかれさま」と明るく送り出してくれるが……。秋野も最近まで育児時間をとっていたので、静子の気持が手にとるように判るのだ。

静子は仕事がどうしても終わらない時は、家に持ち帰ることがある。翌日の十時までに点検を終えなければいけないカードをそっと誰にもいわず持ち帰って、子どもたちを寝かしつけたあと、ねむい眼をこすりながらカードを一枚ずつチェックする。睡魔にまけて、うたた寝をしてしまった夜、ハッと眼を覚ますと、夫が見よう見まねてカードをめくっていた。

「あんがい単純なことやっているんだなあ。総合商社の経理とかいったって。もう全部終わったよ。軽い、軽い。」にやにや笑っている夫をみながら、静子は結婚してみなきや男の人なんて分からないものだなと思った。やさしい男だとは思っていたけれど、子どもの送り迎えにはじまって、こんなに助けられるとは予想もしなかった。

翌日、点検のすんだカードをもって出勤し、すでに三〇分前から仕事のはじまっている職場に「おはようございます」と言いながら、席につく。誰からも「おはよう」の声は返ってこない、秋野が席をはずしていると、こんなふうに一日が始まってしまふ。前の晩の夫の協力で、続けられるかもしれないと思った気が、こなごなに崩れ去ってしまう。昼休みに秋野と話し、すこし気持が晴れるが、周囲からの「辞めるべきだ」という無言の圧力に抗し切れない気分が日増しに強まってくる。忙しくて、誰もが

経理本部削減人員 1982 年

	82年4月 現在人員		年間削減 目 標		削減後人員	
	男	女 (A)	男	女	男	女 (B) (B/A)
経理第Ⅰ部	44	93	3	25	41	68 (73%)
経理第Ⅱ部	37	59	10	16	27	43 (73%)
経理第Ⅲ部	17	33	2	9	15	24 (73%)
経理第Ⅳ 部	22	29	4	10	18	19 (66%)
合計	120	214	19	60	101	154 (72%)

自分のことだけで手いっぱい、とても他人の状況を理解する余裕なんかないのだからと静子は自分に言い聞かせてみるのだが、これ以上この冷え冷えとした空気に耐えていく自信がもてなくなっている。明るい職場にしたいという願いを強く持つてはいるが、自ら切り拓いて職場の雰囲気を変えたいという自信はすっかり失せてしまった。

最後の日

一九八三年十二月二十八日、昼休み、寿司屋の座敷に静子を囲み十数人の女性たちが「お別れ会」をひらいた。若い時枝が司会である。

「いつもニコニコしていて、やさしい静子さんが明日で退社されます。私、とっても残念ですけど、これから元気な赤ちゃんを生まなくてはならないし、ぜひがんばってほしいと思って集まりました。時間がないのでお寿司を食べながら、順々にひとことずつ、お願いします」

独身の頃と変らぬ愛らしさを持ちつづけたことや、決して髪ふり乱して共働きをしているという雰囲気をつけていなかったことを感心する若い女性の発言があり、また組合婦人部と一緒に役員を引受けて苦労した思い出を披露する人ありで、昼休みはまたくまに過ぎてゆく。十数年の結びつきに、ひと区切りつけることに触れ、涙声になる人も少なくない。地域の人たちと深く結びついて、三人の子育てに力を尽すことも有意義だし、三人だけでなく地域の子どもたちを視野に入れ、その母親たちと友だちになってほしいという注文も出された。

私はこの間、いったい何をしていたのか。ものごとの整理、どう条件を切り拓けるかなどと冷やかに考えて、静子が続けたいという気持と続けられないという周囲の圧力にはさまれた苦しみを少し

も理解できていなかったのではないか。私自身の寄り添いかたもまた、静子の退社に拍車をかけてしまったのではないか。

静子は終始ニコニコとうなずきながら聞いている。この三カ月のあいだに、幾度となく静子は泣いたはずである。ある時は湯沸し場で、あるいは手洗いで顔を洗ってごまかしたこともある。私と食事をした時も、コーヒーを飲んだ時も涙を流した。しかし、この送別会では本来の静子の笑顔に戻ったかのようにみえる。

「私は短大を卒業してから十三年働いたことになりました。私の青春というか生活が全部ここにありましたよ。遠くて通勤が大変でしたよ。よく言われませんが、一度も大変だと思わなかったことないの。ほんとうに。これからは出て来ますので、会ってください。あ、友たちでいてください。今日はほんとうにありがとうございました」

十二月二十九日。いよいよ仕事納め、静子の退職の日となった。静子は同じチームの全員に「幸福の貝」をひとつずつ配った。赤い縮緬で小さな二枚貝をつつみ、鈴がひとつ付いている。十三年間働いてきた職場を去ることになって、どのような思いを籠めて贈ったのだろうか。

表面的にはふだんと変わらない様子で「幸福の貝」を受けとった職場に残る人たちに、なにを残したのだろうか。

